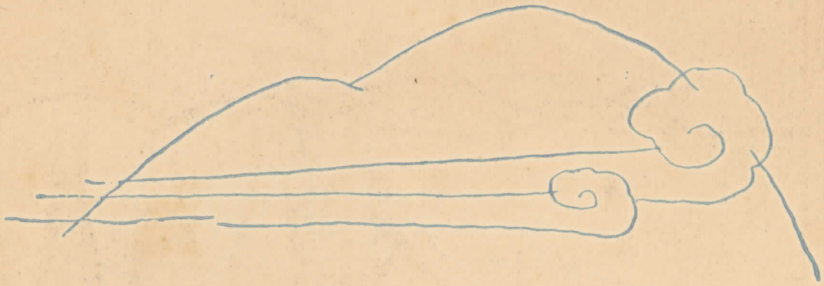
演藝畫報

第七年・九月號

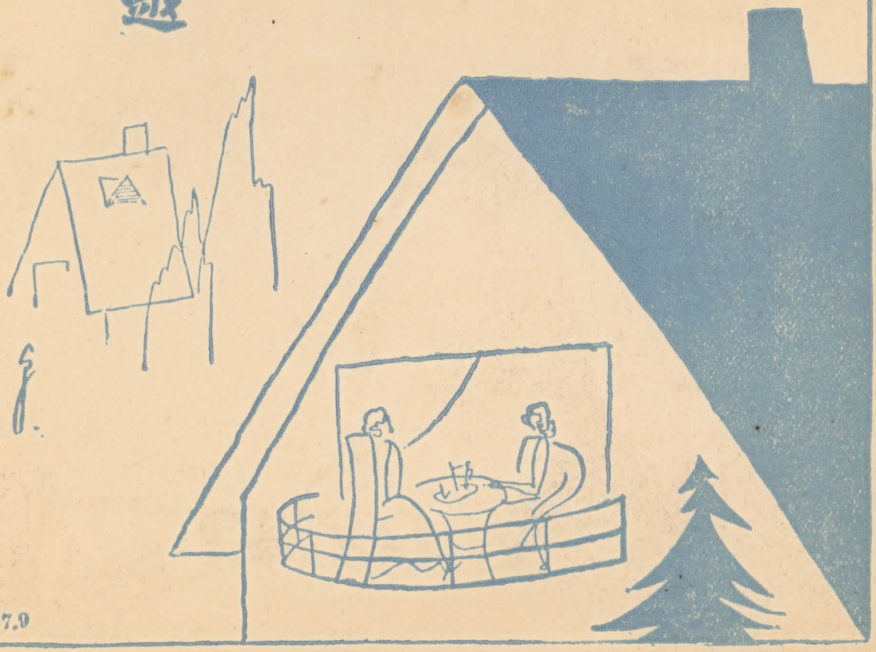
昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和七年八月廿一日印刷
昭和七年九月一日發行（毎月一日一回發行）



秋を味ふ

なつかしくも豊かな秋の生活が始ります。先づ話題に上る三越の三彩會は一層深化された單純美を強調して九月下旬、華かな染織流行の幕を開くほか、雜貨、洋裝品など、いろどりも鮮かに秋の流行界にデビウするこゝでありませう。

大阪 三越



7.9

風味必ず御氣に召す

天ぷら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席で是非御會食を！

道頓堀戎ばし北詰

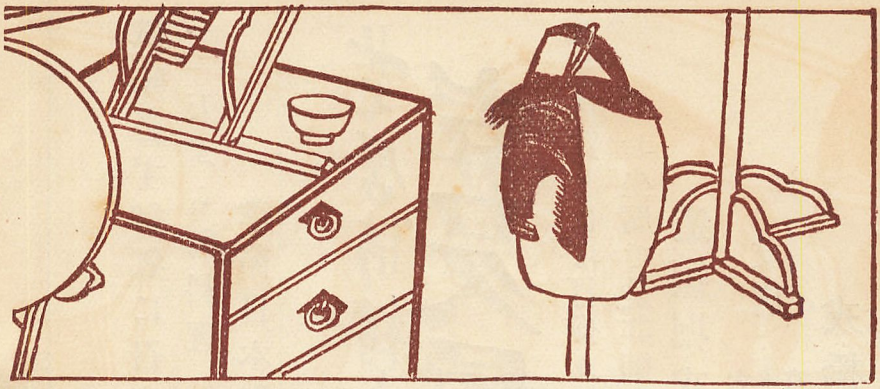
大阪支店　北新地裏町

支店

京都支店　木屋町ドングリ橋

戎橋　喜久屋北店開店

（心齋橋筋二丁目）



道頓堀

昭和七年九月號　第七年　第七十二輯

繪口

◆中座・おふさ德兵衞『重井筒』◇德兵衞　福助・女房おたつ　魁車◇心中浪華春雨◇大工六三郎　壽美藏・お園　松蔦◇紅蓮の都◇足利義政　壽美藏・足利義親　龜藏・鶴姫　延太郎◇紺屋のおろく◇おろく　市川松蔦◇月の大魚◇漁夫龜吉　龜藏◇唐人お吉と攘夷群◇出雲路源三郎　壽美藏・唐人お吉　松蔦・姉小路公知　魁車・田中新兵衞　訥子・松浦武四郎　橘三郎・岡田備後守　吉三郎◇重井筒◇吉文字屋宗德　九團次・紺屋德兵衞　福助。

◆浪花座◇新家庭讀本◇松元の父　小織・松元久　山田・きみ子の弟出　高田・久の妻きみ子　石河◇沖の鷗◇娘お園　石河◇炭燒く男◇隅田初子　東・炭燒き文造　十吾・運轉手樋口　山田・文造妹久江　石河◇底谷の街◇青年　天外・タイピスト　浪花・青年の戀人　春日・その女中　橘◆文樂座◇播州皿屋敷◇お菊　文五郎・鐵山　榮三◇酒屋◇三勝　文五郎◇新作　其幻血櫻日記◇新作　名大阪名所。

重井筒の研究

羽織落の話……高安吸江（二）

『重井筒』の考察……倉田啓明（六）

◆作者のことば……◆

□心中浪華春雨……岡本綺堂（二四）

□『唐人お吉』について……（三二）

紙上舞臺

大森痴雪作『紅蓮の都』…芝居物語……（一八）
岡本綺堂作『心中涙華春雨』…おほむ石……（二四）
眞山青果作『唐人お吉と攘夷群』…見たまゝ……（一〇）
近松門左衛門作 食満南北脚色『おふさ徳兵衛』重井筒』…芝居小説……（二二）

◆福助と魁車のコンビに寄せる……

魁車と福助……西尾福三郎（二八）
重井筒……大澤休像（二〇）

俳句と川柳

□俳句『盆替』……（二十句）……入江來布（八）
□私の『川柳』……食満南北（三〇）

◆久々お目見得の御挨拶……市川松蔦（五）

◆京阪劇壇逸話集（上の巻）……瀨川春江（三四）

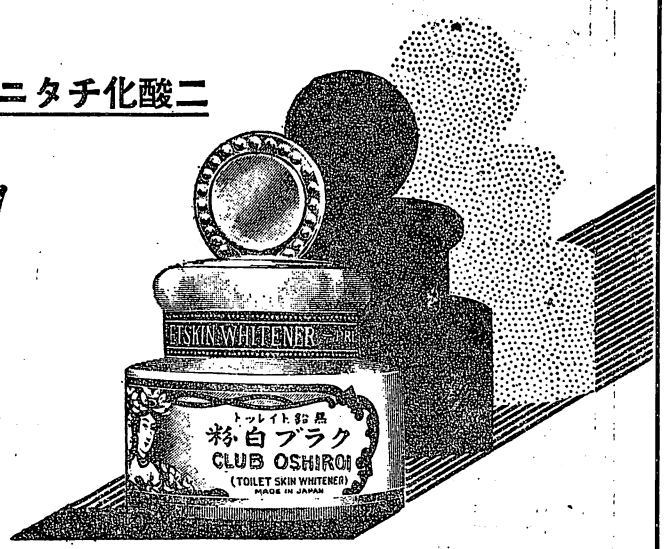
消息

□九月の道頓堀……（一〇）
□逝ける淺尾大吉……（三三）

□編輯後記……住田冬和（三八）
□挿繪と表紙……大塚克三

二酸化チタニウム配合

クラブ白粉



綠の街をゆく
麗人の魅力

清新初夏の
街をゆく
佳人の群に
ほのかな香り
クラブ白粉の
粧ひや麗はし

高雅な白色
モダンな肌色
優雅な桃色
清楚な水色

純白固煉

御園チタニーム白粉

正價 金五十錢

新發賣

▼驚異的

新化粧美！

■**艶麗な濃化粧に**……
目もさめる様な白さ。明るい華やかな澄み切つたお化粧上り。

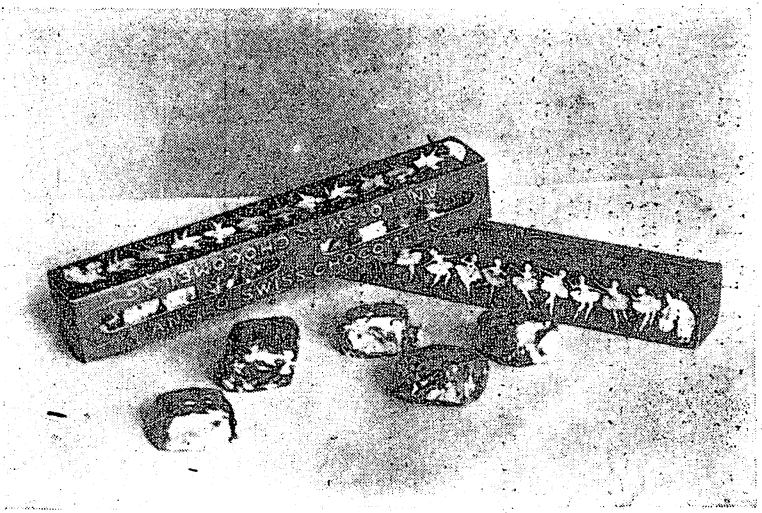
■**清楚な淡化粧に**……
うすく溶いても白さが濃く、ノビが平らでムラがなく、さつぱりした美しさ。

■**お襟の魅力に**……
くつきり冴えた美しさ。お召物を少しも汚しませんから快くつかへます。

□斷然優良な新原料が持つ此白さこそ
新日本女性美です！

アングロス井ス
ミルクチョコレート
コーヒキャラメル
チョコレート キャラメル
チョコメル

大阪市東區豐後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)一六六一 二〇一三番 四六四九



〔夜の部〕

〝おふさ
徳兵衛　重井筒〟

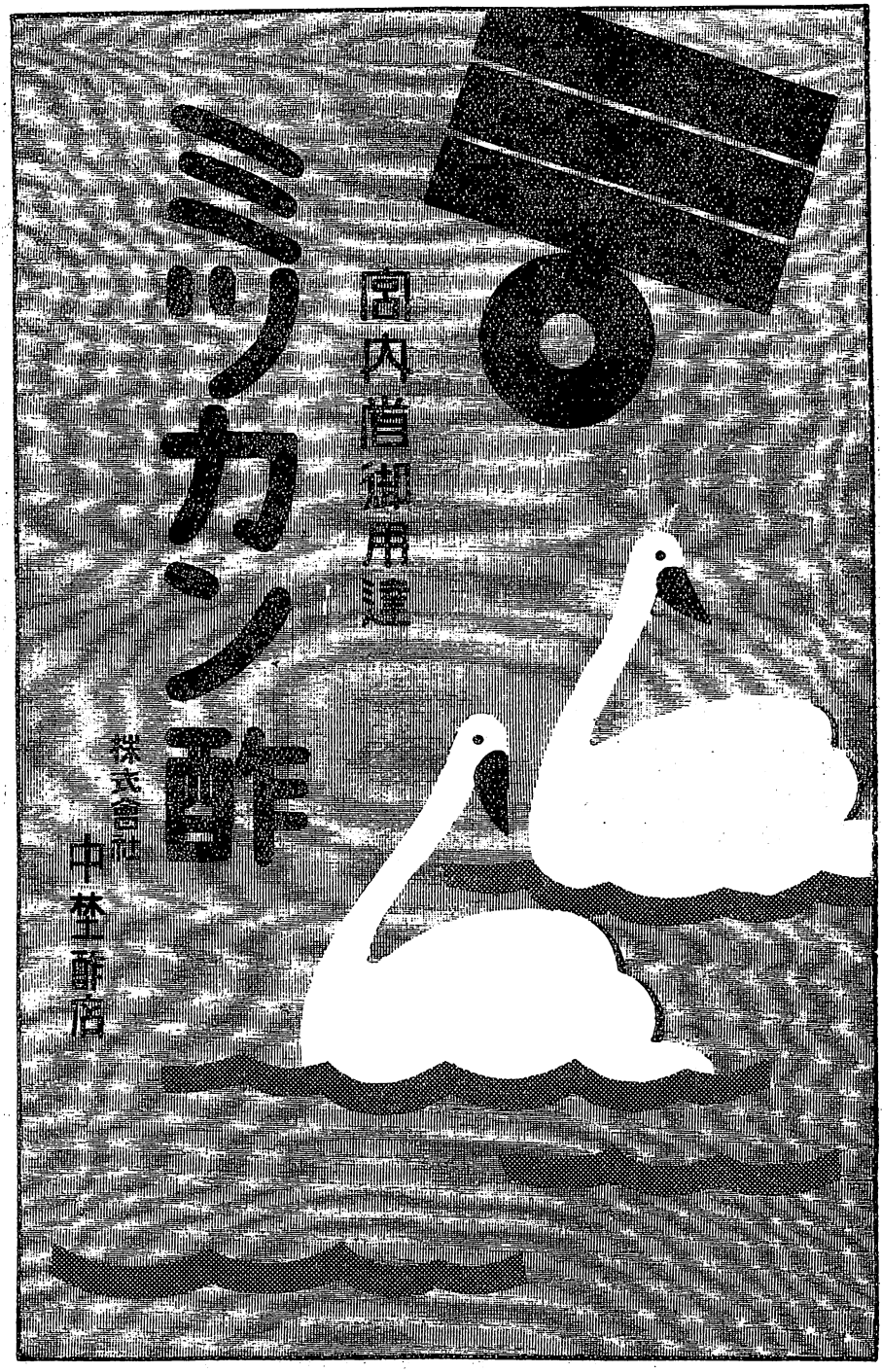
徳兵衛　中村福助
女房おたつ　中村魁車

〔畫の部〕

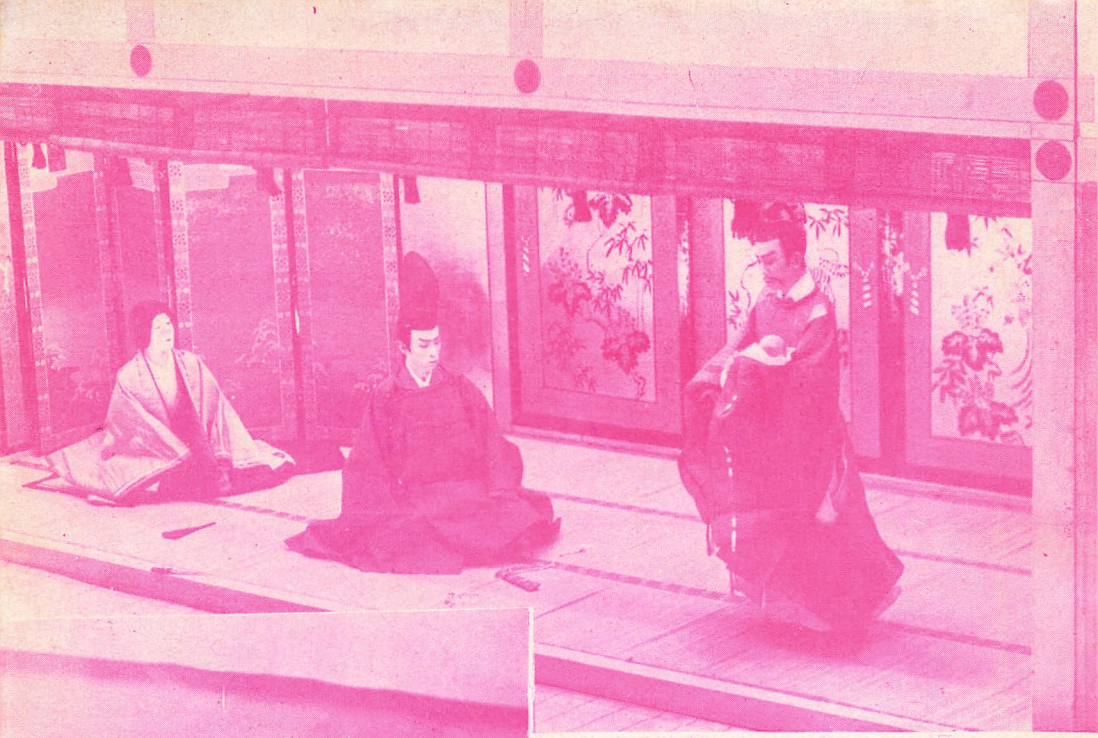
〝心中涙華春雨〟

大工六三郎　市川壽美藏

和園　市川松蔦


宮内省御用達
ミツカン酢
株式會社
中埜酢店

鰻
野菜川
御魚
料理
常店
特御
特製
道頭坊
成格
電話南
四八一〇
九五二
四八四四
藤栄
栄藤
栄川魚



九月の中座

〔壹の部〕

"紅蓮の都"

（上）足利義政　市川壽美藏　足利義親　市村龜藏　鶴姫　實川延太郎

熊谷源三　魁車

にくいあん畜生は
紺屋のおろく
猫をかゝえて
夕日の濱を
知らぬ顔して
しやな〳〵と

にくいあん畜生は
筑前絞り
華奢な指先
濃青に染めて
金の指輪も
ちら〳〵と

にくいあん畜生が
薄情な眼つき
黒い前掛
毛繻子かセルか
博多帶しめ
からころと

にくいあん畜生と
かゝへた猫と

〔夜の部〕〝勢獅子〟 嵩頭

〔壹の部〕
〝紺屋のおろく〟
おろく 市川松嵩

赤い入日に
ふとつまされて
潟にはまつて
死ねばよい

〔壹の部〕

〝月の大漁〟

漁夫龜吉　市村龜藏

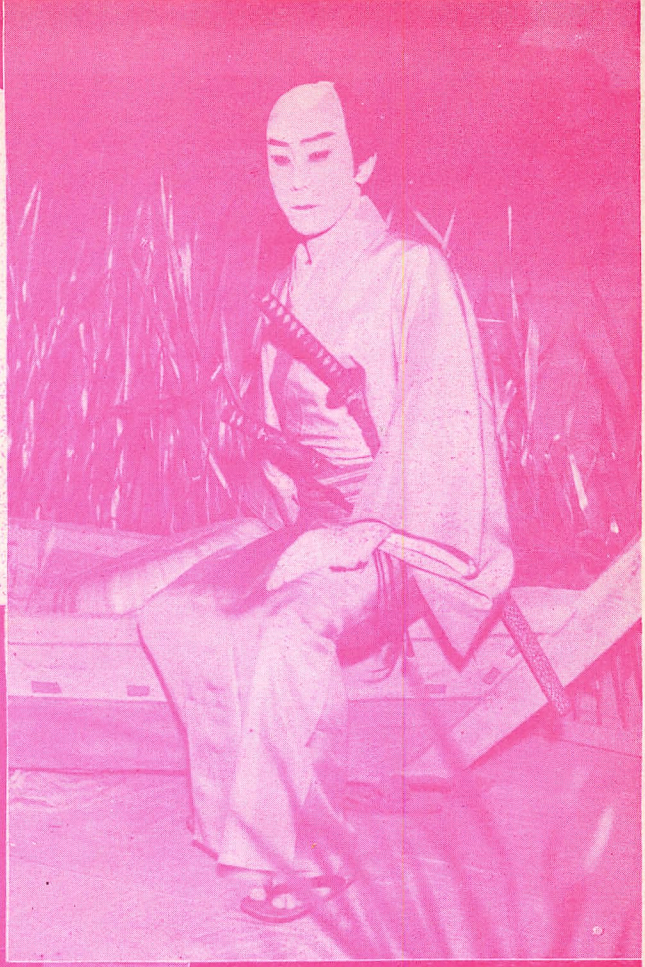
市川壽美藏・市村龜藏

九月の中座

〔夜の部〕

〝唐人お吉と攘夷群〟

九月の中座



出雲路源三郎

市川壽美藏

姉小路公知
中村魁車
唐人お吉
市川松蔦
田中新兵衛
澤村訥子

〔夜の部〕

〝唐人お吉と攘夷群〟

松浦武四郎　嵐橘三郎

岡田備後守　嵐吉三郎

九月の中座

茶
西区みなとまち
竹立半
電話ながの二六三三番

資本金　參千萬圓

大阪市東區今橋

共同信託株式會社

取締役會長　菊池恭三
常務取締役　門脇正
同　吉田平吾

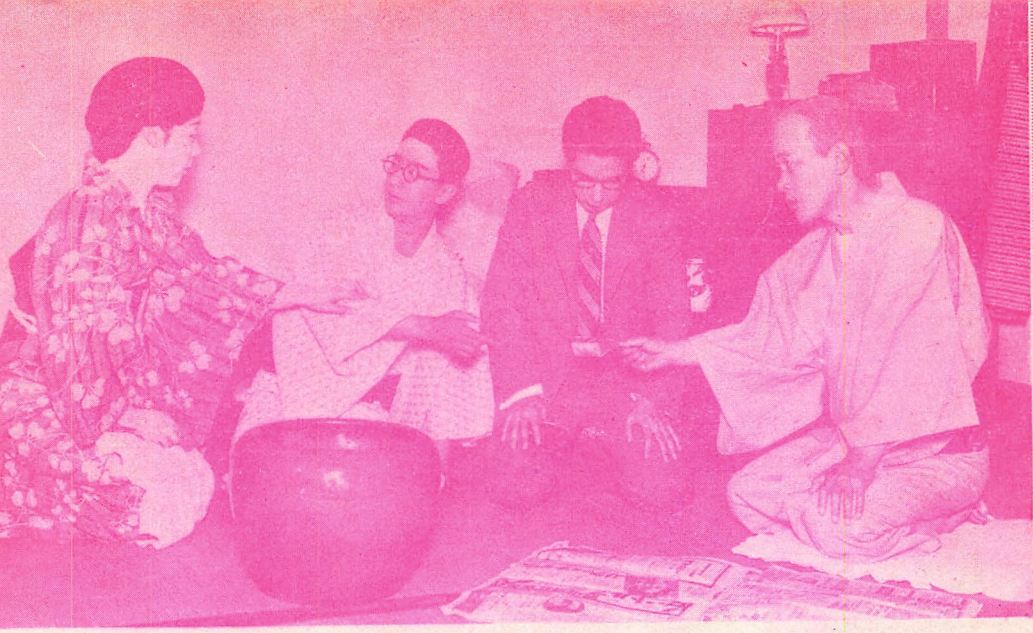
〔夜の部〕

"筒井重"

九月の中座

吉文字屋宗德　市川九團次

紺屋德兵衛　中村福助



"新家庭讀本"

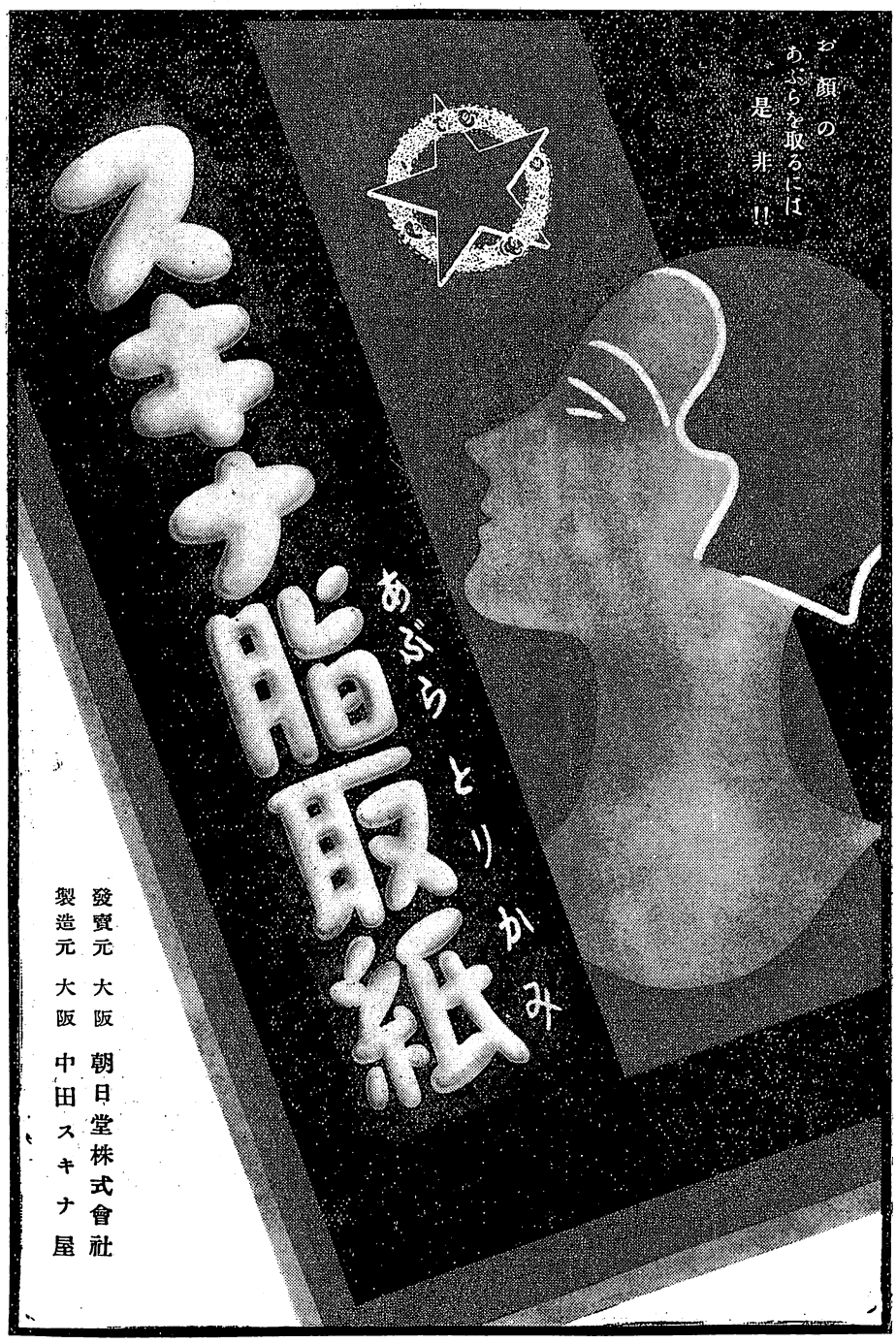
"沖の鷗"

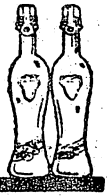
娘お關・石河薫

松元父の・小織
松元久・山田
きみの子出弟・高田
久の妻きみ子・石河

"炭燒く男"

隅田初子・東
炭燒き文造・十吾
運轉手樋口・山田
文造妹久江・石河


お顔のあぶらを取るには是非!!
あぶらとりかみ
脂取紙
發賣元 大阪 朝日堂株式會社
製造元 大阪 中田スキナ屋



プロシイルマ

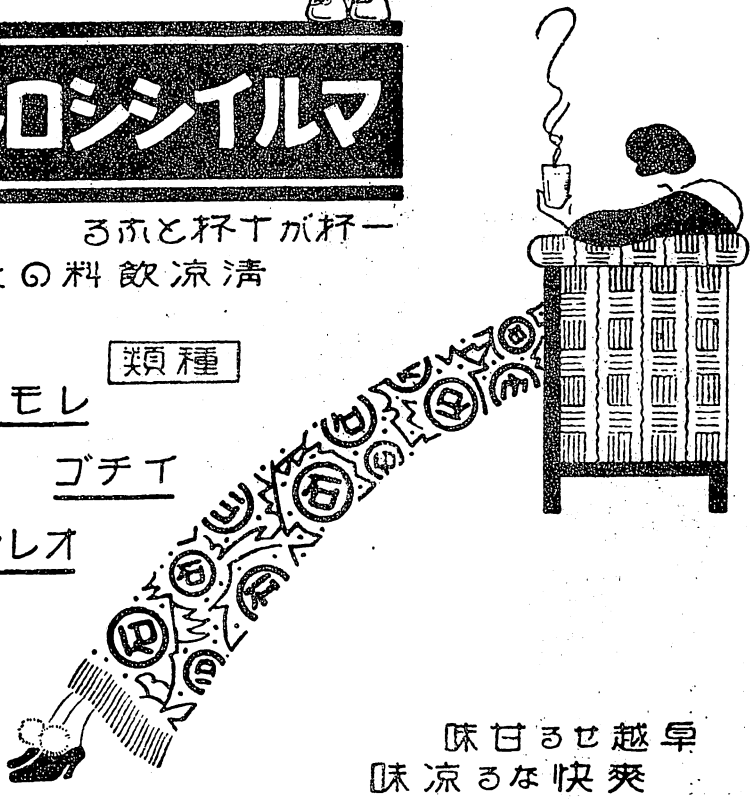
るふと杯十が杯一
素の料飲涼清

類種

ンモレ

ゴチイ

ヂンレオ



味甘るせ越卓
味涼るな快爽

目ラ二町路淡区東市阪大
株会石合薬製石丸
八一六四　七六三一　局本電

・・・座花浪

・・・家庭劇

⇨ 〃街の谷底〃

青年・天外

タイピスト・浪花

青年の戀人・春日

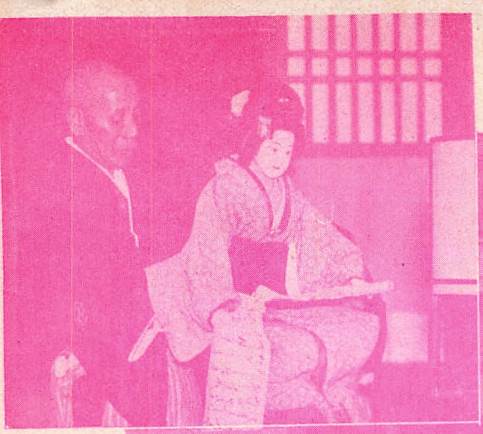
その女中・橘

⇦ 〃炭燒く男〃

炭燒西田文造・十吾

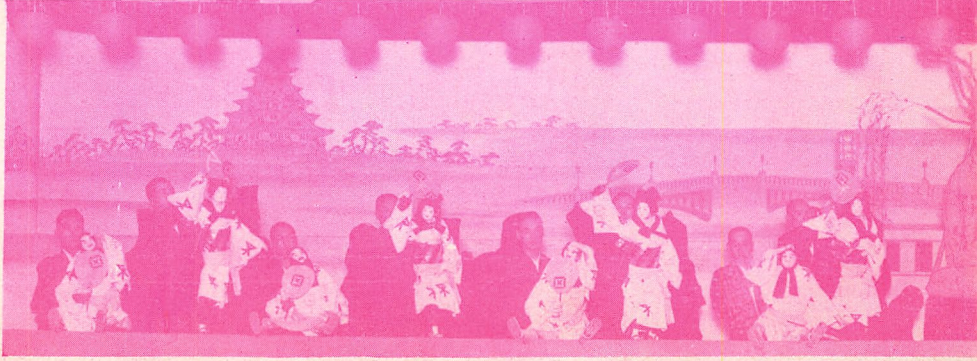
隅田初子・東愛子

◇九月の文樂座◇



播州皿屋敷
お菊　文五郎・鐵山　榮三
〃酒屋〃の三勝　文五郎

新作
其幻血櫻日記
舞臺面



新作
〃名大阪名所〃
舞臺面

小道具・小裂

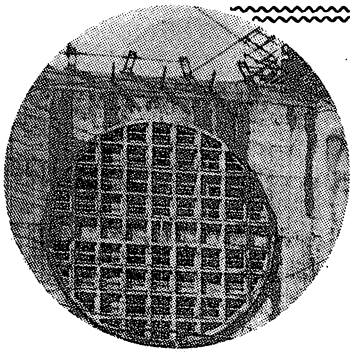
貸衣裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

本店　大阪市浪速區南坂町松竹ビル內
電話　戎五六三四番
東京支店　東京市淺草區並木町十五
電話　淺草五五九九番

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます）



「サンデー毎日」懸賞入選

大阪歌舞伎座 上演脚本發表

出誕迫る演劇の錦城へ

輝きでる劇壇の收穫

待たれる今秋のコケラ落し

萬人待望の焦點！未來の大阪文化を約束する新しい演劇殿堂——大阪歌舞伎座開場記念興行を意義あらしめるため、大阪毎日新聞社が『サンデー毎日』誌上に於て、さきに賞金二千圓を懸け開場記念興行用上演脚本を募集しましたところ、この計畫は一般多大の同感を以て迎へられ應募總數實に千二百三十一篇の盛觀を呈しました。これはとりもなをさず、演劇と大衆の交渉がより深まり、一般に演劇そのものに對する親しみが密接になつたことゝ、また他方、劇文學に對する理解が普遍化され、多くの有爲の人々によつて劇作がなされつゝあることを裏書するもので、同時に演劇が單なる低調な娯樂物としてのみの存在物だつた時代を一歩抜き出で、本當に演劇そのものが、われらの生活に、いかに重要性を具備してゐるかといふ認識が强調されてきた証左で、實にわが國劇壇のため慶賀すべき現象です。

選に當つた大阪毎日新聞社編輯局各關係者は、この應募各位の熱意に動かされて再三愼重なる詮衡を遂げた結果、茲に愈よ大阪歌舞伎座の開場を飾るにふさはしき力作三篇の入選を發表と共にこの新劇場に送り出すことになりました。

入選三篇

一等一篇【賞金一千圓】
歌舞伎名所圖會〔一幕二場〕
東京市麹町區三番町三番地
三好次郎

二等二篇【賞金各五百圓】
秀吉と家康〔一幕三場〕
東京市外高田雜司ヶ谷一一二四 市川しげ方
伴槇彦

堂島繁昌記〔一幕〕
東京市小石川區宮下町四番地
大村嘉代子

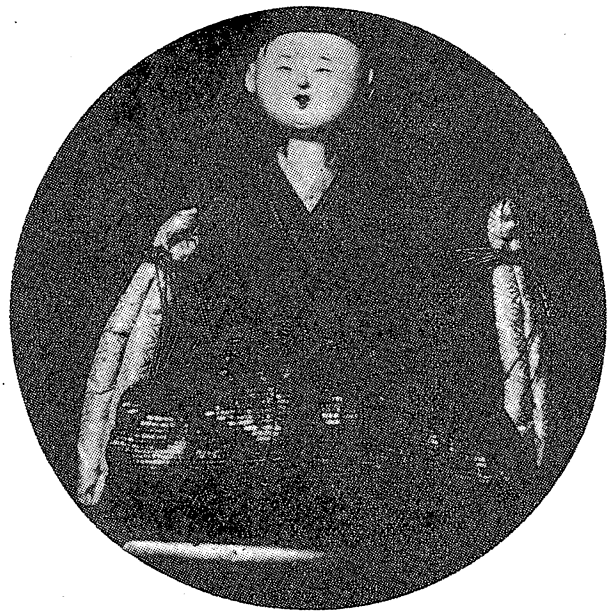
月刊·演劇研究·雜誌

九月號

戲劇

第七年

第七十二輯



羽織落しの話

高安吸江

情理をつくした女房お辰が口説き泣きに忽ち一念發起して、折角換へ玉まで拵らへて借りた丁銀四百目を放り出したものゝ、さて隱居のそうとくに此事を報らせやうと出かける四ツ辻、生薑酒して待つ女房も嬉しいが、生死の出來る金の首尾を按ずる房が玉子酒には猶更心ひかれて、行きつ戻りつ迷ふ。

紺屋の德兵衞は、恰度御屋敷の爲替の金をふところに堂嶋へ行くつもりが、ツイフラ〳〵と米屋町まで行て始めて氣づく龜屋忠兵衞とよく似て居ます。

わけて冥途飛脚の方は四五年後に出來たゞけ魂ぬけて空虛な心持がよく描かれ、出剛れた足癖で心は北へと思ひながら身は新町へと引かれ行く、その始りからしてもう不思案の惡魔に捉へられて居ます。

しかし重井筒の方にしても情に脆くて意志が弱く、刹那刹那でいつも少しでも强い方へ引ずられて行く元祿享保頃の平凡人、プチブルの若い町人が巧に寫されて居るのであります。

此場で演ぜられる羽織落しは原文には出て居ませんが、何頃から始められたか明かではありません。しかし今日では梅忠の方を人形で、紺德の方を歌舞伎でやる習慣になつて居ます。始め芝居の重井筒で誰か羽織落しをやつたのに對して、人形で冥途飛脚にそれを模倣したか、或は人形が先で歌舞伎がその眞似をしたか、何にしても確かな記錄はありません。

それには此道の專門家西澤一鳳が既にその著脚色餘錄（嘉永四）に、古く人形にも遣つた事と見へ、此四ツ辻で羽織を落して濡事師のうつゝになる樣を見せるなどゝ極めて漠然と書いてゐる位ですから判然しないのがほんとうでしやう。

同書に記されてゐる中山文七の事、卽ち彼が此德兵衞の役で每日落した羽織をそのまゝ抽籤で見物に

取らせて人氣を煽つた話は、此れまで諸書に轉載されてかなり有名ですから略しますが、無論此時が羽織落の最初とは云へません。

此興行は寛政の頃とありますから、かの天明二年の九月に一世一代をやつた和泉屋由男の文七ではなく、其弟の養子猪八郎ち二世文七の事で、手元に番附がないから確には云へませんが、恐らく寛政九年五月中の芝居で御所櫻の切に演つた時の事かと推定せられます。此男は初代程の名手でないから數年前（寛政二年十月）角で演つた二世嵐三五郎の德兵衞に對抗すべき新工夫をこらしたのかも知れません何しろ此三五郎雷子は和事、所作事の名人で一代の當藝を極上、上、中、下の四等にわけると德兵衞の役は上品の部に屬するそうでした。

其外此役をつとめたのは三代四代の中村歌右衞門實川額十郎その他で文化十四年から慶應元年まで十回ばかりも出て居ます。前には上下とあるのが後には上中下となり、中には特に四ッ辻羽織落の段とことはつてあるのさへ見受けられ、又何か憚る事でもあつたか、おうた篤兵衞となつて居るのもありました。

次に人形振です。狐火の八重垣姫や金閣寺の雪姫日高川にお七など、歌舞伎の演出に人形を模する例はいくらもありますが、その起原もやはりわかりかねます。併しそれは人形芝居の全盛期よりも寧その凋落期に入つて後の事らしく、一方歌舞伎の復興と共に何がな珍趣向をと新奇を競ふ中の一ッとして企てられたものと考へられます。恰度その頃（天明期）に出來た首振なども直接間接に此れが素因の一をなした事でしやう。

首振といふのは子供役者がしぐさを練習するためにする義太夫地の無言劇で、梅玉、歌右衞門なども幼時しきりに是を修行しましたが、その上彼は當時人形遣の名手吉田文三郎の薫陶をうけたのですから後年此羽織落の人形振で喝采を博し得たのも偶然ではありません。それかと云つて彼が此人形振の創始者といふのではなく、羽織落そのものと同樣に誰か無名の天才が思ひ付いたのを、いつか檜舞臺へ上すやうになつたのだらうと思はれます。

明治になると三年十月に堀江で二代目延三郎が演つて以來、多く井筒屋系統によつて演ぜられてゐますが、近頃では河内家延若丈の當藝となつてゐます昭和三年四月の浪花座を見た人は多いでしやうが、彼は既に明治三十一年に京でやり、又同四十二年に

は先代二十五年追善として朝日座で上演して居ます役柄と云ひそれに追善狂言に出す位ですから定めて先代も此役で當てたらうと思ひましたが、實はやつたことがなく却つてその子息のお得意になつたのも奇妙です。それで此延若丈の德兵衛は在來の演出をもとゝして演ぜられたのですが、生來豐富なその愛嬌の上に「生蠶酒と玉子酒とがてつぱつてよる」などゝ、ヨタな入れごとが多く見た眼の面白い技巧本意で、見物はワアッと嬉しがるものゝ、とても心中の出來そうな男でなく、羽織を落すどころか四百目の金を受取るとそのまゝ房の處へ飛んで行くに違いないとさへ思はれます。その男が四ツ辻でウロウロしなければならぬのですから、第一演者自者阿呆くさうてやつて居られますまい。それで人形振で逃げたのかも知れぬと、強いて邪推されないこともありません。

斷つておきますが私は何も河内屋や人形振を批難して居るわけではありません。九代目團十郎が八重垣姫をやつたとき、人間を眞似やうとする人形を、人間が眞似するのは誤まつて居るとの見地から在來の人形振を廢しましたが、五代目菊五郎は同じ役を例の凝性から樣々に苦心した結果、巧な人形振で看客を喜ばせました。是等は皆主張の相違ですから、私は無論此兩人に向つて平等に敬意をはらうのを吝むものではありません。それで河内家の德兵衛を面白く見物し又人形振を禮讃する一人ではありますが此れまでの德兵衛の演出が誤つてゐる爲め人形振が單に技巧の妙に止まり肝心の性格描寫が無視されたのを、私は頗る遺憾に思つて居るのです。

今回の重井筒はこうした興味本位の變質した紺德から解放して、能ふる限り近松の原色を失はぬやうにし、尙氣分を新しくするために人形振をも廢することゝなりました。此れは在來のものを見なれた人には山もなく花に乏しい、極めて淋しい感を起させるかも知れませんが、行詰つた歌舞伎の現狀にあつて近松へ還つてそれを見直す必要を感ずる同好者には、少からざる興味をもたらすべき試演であります殊に演者である寡默で生眞面目な高砂家は、小心のやうに見へて時には中々大膽であり得る人ですからキツト人形振に捉はれない新演出により今までとは全く別な味を出して我等を驚かすかも知れません。唯それが眞の近松復興を意味するや否やは、一ツに同優の努力研鑽に待たねばならぬと信じます。

久々お目見得の御挨拶

市川松蔦

唐人お吉
市川松蔦

此度は十一年ぶりで錦地へお何ひ致す事と相成りました。以前よりお伺ひ申度くも其機會に接せず神戸及京都へは御承知の通り伺ひましても御地へはなか〳〵參る事が出來ませんでしたがはからずも此度其機會が參りました次第で御座います。お吉のお話で御座いますがこれは御承知の通り眞山青果先生の大作で昨年歌舞伎座で連日滿員の盛況で御座いました。眞山先生よりのお話しでお吉は他が武士ばかりでさら〳〵として居りますのでなるべく芝居をして下さいとの御注文でしたから其の心で演じて居ります。此の次に參りました時はお吉の最後の場を是非上演致し度いと存じます。前にも申上げました通り久々の事で御座いますのでおなじみも薄い事で御座います故皆樣のお引立を切に御願ひ申上げる次第で御座います。

桃谷印刷株式會社

大阪市東成區鶴橋南之一町目

電話天王寺 二六七〇 二六七一

『心中重井筒』の考察

倉田啓明

近松の世話淨瑠璃のうち、心中物は最初の「曾根崎心中」（元祿十六年五月）以降、最後の「心中宵庚申」（享保七年四月）まで十一篇、他に準心中物ともいふべき、「丹波與作」（寶永五年）と、「五十年忌歌念佛」（同六年十月）を合せると都合十三篇に及んでゐます。その中で「心中重井筒」は、「外題年鑑」によれば、寶永元年四月の興行になつてゐるが、この書の淨瑠璃年表は、享保以前の分に甚しい誤謬があるので、當今では寶永四年の冬といふ説が正しいことになつてゐます。

さて、この「重井筒」は、「曾根崎心中」と、「心中二枚繪草紙」（寶永三年三月）と同一型の作品で、三部曲と稱してもいゝほどで、お房でも、お初でも、お島でもおなじ曾根崎新地の娼婦です。曾根崎新地はそのころの新開地で、遊興費も格安だつたものと見えて、非常に繁昌したのですが、そこの女は今の言葉で言ふと、所謂私娼に屬するもので、當時大阪に於ける公許の遊廓は、新町だけでしたから、「冥途の飛脚」の槌屋の梅川などは、格の低い散茶女郎にしても、公娼は公娼です。ところで、「曾根崎心中」のお初徳兵衞が、曾根崎天神の森で心中を遂げ、それが近松最初の社會劇として竹本座の舞臺で上演されてから、天國に結ぶ戀の心中憧憬者が頻出して、まるで現代のやうに「心中時代」を現出しましたのは、當時の世相の反映にもよりませうが、一面近松の筆の力に誘惑された傾向も否むべからざる事實です。近松は決して心中を奬勵したわけではありますまいが、「重井筒」でも

「……水のあはれや汲みあげて、重井筒の心中と、御法の水をぞたゝへける。」

と結んであつて、心中禮讃の口吻を洩らしてゐま

すが、「曾根崎心中」の「……貴賤群集が同向の種、未來成佛疑ひなき、戀の手本となりにけり。」

又は、「心中宵庚申」の、「……枝を鳴らさぬ君が代に、類稀なる死姿、語つて感ずるばかりなり。」

に至つては、明かに心中讃美以上、奬勵、宣傳の語句であります。もつとも近松は別に心中を奬勵するつもりではなかつたのでせうけれど、詩人として痴情や金に窮して死恥を晒した男女の最期を美化したので、一面においては當時の頽廢した世道人心の機微を洞察して、興行政策上、ジャーナリスチックな麗筆を揮つたわけでもありませう、然しその半面には、古來、武士道精神によつて陶冶された、犧牲の精神の發露として、心中を讃美する氣持にもなつたことゝもおもはれます。

とにかく、元祿十六年五年の「曾根崎心中」以來享保七年までの二十年間、竹本、豐竹二つの櫓の興行に心中物が絶へなかつたのは事實で、豐竹座の紀海音のごときも、曲節は別として、詞藻の點では近松に遠く及ばないにしても、「心中涙の玉の井」「心中二つ腹帶」「梅田の心中」のやうな佳作を續々出してゐまして、「二つ腹帶」はいふまでもなく、「宵庚申」と同一材料を脚色したもので、二座競演の壯觀を呈したのでした。

さて、「重井筒」は、おなじ心中物でも「心中天網島」（享保五年十二月）や「心中宵庚申」ほどの傑作ではなく、「曾根崎心中」よりも下位に立つ作ではあるが、然し凡作といふべきものでもありません。それに變つてゐるのは、心中の際に、普通なら南無阿彌陀佛の念佛を唱へるのが、この作だけは、紺屋の德兵衞が女房のために改宗して、南無妙法蓮華經の法華の題目を唱へて、井中に投身します。この件などは當時、恐らく受けたのではありますまいか。今度の中座ではこの心中場を見せないさうですが、私の考では近松の作を上演するなら、やはり全部やつてもらはないと喰ひ足りません。殊に心中物は心中場が最も大切です。勿論人形のために書いた淨瑠璃ですから、歌舞伎の舞臺ではやれないところも多々ありませうけれど――また、原作特有のあの殘酷な情死の光景を、舞臺に再現することの困難なのは、よくわかりますが、やはり何とか工夫して心中場を見せないと、意義がないだらうとおもひます。

盆替（二十句）

入江來布

涼しさや盆狂言の表木戸

盆芝居萩と桔梗の藝題哉

芝居見に秋の團扇のなつかしや

銀扇に秋なりけらし盆芝居

女形のすかしさよ盆替

女形の着て そ秋去衣かな

おふさ德兵衛薄茅萱の盆替

初嵐唐人お吉髪と

心中の浪華の秋よ盆替

心中の昔を秋の霞かな

心中の途ぞ安かれ天の川

心中に泣いて歸れば秋の聲

泣きたさの見手衆すゞろや盆芝居

朝露に夜露にすゞろ盆替

秋の日の棧敷にあたる芝居哉

文月の芝居なれはそ女づれ

盆替り身にしみそめし始めかな

燈籠をつりてありけり盆芝居

星月夜灯つらねて盆芝居

盆替踊りつくして果てにけり

芝居見たまゝ

唐人お吉と攘夷群 三幕

序幕　天城山の絶頂に近き深林
京都靈山叔阿彌の庭
同　奥座敷
二幕目　京都嵐山の山道
同　老ノ坂屋の奥座敷
同　朔平門
大詰　京都七條田中新兵衛隱家
近江の國粟津の松原

天城山の絶頂に近き深林

今しも街道の遙か彼方から驛路の鈴の音が次第に近づき、微に人夫の歌ふ唄も聞こえて來ます。

是ぞ我が開國史上に特筆すべき、最初の駐日米國領事タウンセント・ハリスの一行が、將軍家に謁見す可く堂々公式の行列を揃へ、江戸表を目指して此方に進み行く所なのです。實にこれ安政四年十月初旬の事でした。

扨當時の我が國情は攘夷を唱へる者は十の中八と云ふ有樣で、倒幕を企む諸國浪人は、ハリスの江戸出府を途中に要擊して、幕府に一大致命傷を與へやうとしてゐるのです。此の不穩の情報を耳にした幕府はスワ一大事と、沿道の警戒は水も洩らさぬ有樣です。

此の騷ぎの最中に何處からともなく姿を現はした一人の女が有ります。是ぞ外交政策の痛ましくも哀れな犠牲となつた唐人お吉です。

始めお吉は下田奉行から、ハリスの侍妾になるやうに、と申し渡された時、斷然之を拒絶したのでしたが、支配組頭伊佐新次郎からの、事を分けての懇願に、何事もお國の爲と涙を呑んで承諾したのでした。然るに世間の人々は如何

九月の各座

東西合同大歌舞伎

中座

晝十二時・夜五時半二回開演

第一部

一番目　紅蓮の都　三幕

序幕　相國寺の境内
同　門外

足利義視　細川勝元　山名宗全　伊勢貞親　赤松則祐　三好長慶　浪人國侍　相江田權之允　青吉の龜　同松甲　義視の家來　勝元の家來　宗全の家來　政則の家來　足利義視　卿龜　細川勝元　山名宗全　伊勢貞親　赤松則祐　三好長慶　浪人國侍　相江田權之允　青吉の龜　同松甲　義視の家來　勝元の家來　宗全の家來　政則の家來

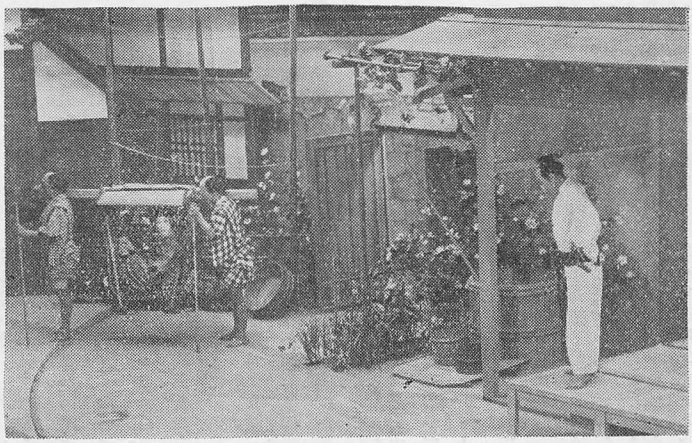
訥九郎　團之助　扇駒　鳳凰　豐禍　豐太郎　治之助　笑郎　輔助　大ぜいの家來　大ぜいの家來　大ぜいの家來　駒三郎　黛光車

なる眼を以て彼女を見たでせうか。其處には曾て謳はれた「新内お吉」の名は消へて、唯「唐人お吉」「洋妾」と云ふ嘲りと罵りが殘されてゐるのみした。そして、却て獣のやうに恐れ嫌つてゐたハリスから温かい眞心と云ふものを泌々と身にしまされたのでした。賞めたゝへて吳れる可き人々は我を罵り、我が憎んだ人が我を慈しむ……。お吉は斯うした人の心の不可解さを思ひつゝ、誠心こめてハリスに仕へたのでした。

が、突如、ハリスは彼女が未だ昔の愛人鶴松と關係を續けてゐると云ふ事を理由に、暇を出して了つたのです。

然し之はお吉にとつては全くの濡衣です、お目的になつてゐる。途上にて私の面會はハリスに恥辱を與へるものであると、お吉の切なつと共に彼女の胸には、何が故にハリスが自分を遠避けたかと云ふ本當の心持が分つて來たのです。實際ハリスはお吉を愛して居りました。それなればこそ、其の將來の幸福を願へばこそ、名を不義にかりて暇を出したのです。こうした眞情が胸にこたへたお吉は、今日を最後の別れにと、此處迄ハリスに會ひに來たのです。然しお吉の願ひは遂に叶へられませんでした。

下田奉行岡田備後守は、お吉の心中を察しながら、今日のハリスは、亞米利加合衆國の使節としての公のハリス閣下である。其の行動は、世界各國の注



窮谷源三民大ぜい
香樹院尼吉三郎車魁
乳人松枝福太郎
侍女福吉之丞芝藝雀
同御臺所富子福松之助

貳幕目　室町花の御所

足利將軍義政　壽美藏
同弟　義視卿　龜子
細川勝元　訥
熊谷左衛門尉　橘三郎
熊谷源三親駒之助車魁
伊勢貞則扇之助
赤松政則鷹童
春鶯好齋　彌三郎
波眞龍　三
學眞藝相　松
鑑豐之助　三
衛士岳眞侍臣　政之助
家の　大ぜい
勝元　來ぜい
妹香樹院鶴尼　延ぜい
乳人松ケ枝　吉太郎
侍女福　三郎
御臺所富子　太郎
御臺所富子　福助
新將軍義尚成一郎
妹鶴姫延太
一子千壽丸豐子

大詰　相國寺の燒跡

第二幕より十餘年後

る頼みをしりぞけて了ふのです。お吉は一人淋しく、過ぎ行く行列をいつまでも〳〵見送るのでした。

お吉の肩を叩く一人の浪士があります。其名は松浦武四郎、お吉の養母お仙とは親しい知人なのでした。彼は倒幕運動に活躍する者で、實は、ハリスを狙撃しやうと忍んでゐたのですが、お吉の姿を見留めて我が心ざす政爭の中心地京都へ上るのには、女と連れ立つて行くのが人目を晦ますに最も便だ、と思案してお吉を京へ誘ひます。お吉とて何の當も無い身、松浦共々都へと——。

京都靈山叡阿彌の庭

同　奥座敷

同　嵐山の山道

京都は天朝の在します所。さすが勤王攘夷の源泉地とて、天下の浪人志士は雲の如く集り、殊に堂上には三條實美、姉小路公知の如き攘夷強硬論者があつて、尊攘論者の意氣正に軒昂たるの時です。こうした物騒がしい中にあつて扨お吉の消息は……。曾て新内お吉とまで謳はれた新内のお蔭にか、土佐藩主山内容堂侯、宇和島侯の寵を受け、其酒席に侍する事も屢々でしたが、醉へば誰憚らず攘夷論を罵倒して、開港論を滔々と辯じ立てるのでした。と、云つてお吉は決して佐幕派と云ふのでは有りません。否寧ろ幕吏の得て勝手、弱い者いじめに對して反感をさへ抱いてゐるのです。然し、しばしの間でもハリスの身近に仕へ、朝夕親しく文明の空氣を吸ふたお吉には、武器も財力も劣つた我が國として、攘夷の到底行はれるものでないと云ふ事が分り過ぎる程分つてゐるのでした。お吉が此の樣に開港論を述べ立てるのは、單に諸侯方の前ばかりではありません。荒くれ者の浪人達に向つても、平然として是をまくし立てるのです。然し土佐侯や宇和島侯の息の掛つてゐる彼女とあつて、誰れ一人刀に手をかける者もないばかりか、人知れず彼女に思ひを寄せる者が出て來るのです。それは人斬り新兵衛と、大和十津川の郷士出雲路源三郎とで、共に攘夷論者の錚々たる人です。開港論を唱えるお吉。攘夷を叫ぶ田中、出雲路。實に戀は思案の外てあります此戀の行末は……。何れ一ト波亂れなくては叶ひません。

それかあらぬか、俄然出雲路の身の上に暗い影がさして來ます。それは堂上に於て攘夷の急

伊勢貞親　駒之助
香樹院尼　吉三郎
老僕佐兵衛福三郎
普明禪師歳徹訥三郎
元行脚僧文亀次郎
熊谷左衛門尉九國三郎
熊谷源三　魁車

中幕

六園三　**心中涙華春雨**　一幕

大寶寺町大工庄藏の内

赤格子九郎右衛門　魁訥
大工親方庄藏　壽英
弟子六三郎　一藏
同三吉成國　子
會所の使昇蔦登五郎
駕同捕手大喜助
福島屋遊女お園松ぜ　蔦

大喜利　踊る時代風景　三場

振附　花柳壽輔
花柳三之輔

五月雨

香取仙之助作
杵屋佐吉作曲

長唄連中

藝者おまつ　松蔦

月大漁

常磐津連中

漁師寅松　龜藏

先鋒と目され、諸國浪士や志士からは最も信頼す可き人と思はれてゐる。姉小路少將公知卿が突然開港論に傾かれた事です。然も、これまで姉小路卿の人物を浪士間に極力推賞したのは實に出雲路其人なのです。其れ丈け、彼の失望と驚きが大きかつた共に、同志の彼に對する疑ひの眼も亦鋭いものでした。其上にも出雲路の心臓を破れる許り波うたせたのは、此の姉小路卿變節の動機には、彼の一生の戀、初戀の人として日夜心を惱ますお吉が携はつてゐる事です。

一日姉小路卿は幕府軍艦奉行勝麟太郎の招きを受けて、靈山なる叔阿彌に勝と會談された事があります。其席上で勝に伴はれて來たお吉は、例の通り滔々と開港論を述べ立てたのです。

勿論勝程の大人物です。一下田の下賤の女お吉の力を借りて、卿を開港論に導いたのでは勿論ありません。少くとも、斯うした無學の女にすら、攘夷の行はれ難い事が分つてゐる、と云ふ事實を知らしめ樣としたのでせう。其後勝は攝海の警備視察を名目に、朝廷から姉小路卿の出張を乞ひ、頻に西歐諸國の兵器、戰術の進歩せる狀態を説明し、幕船順動丸に卿を乗船せしめて洋式戰艦の恐る可き偉力を體驗せしめたのです。此結果姉小路卿は心機一轉開國説に傾いたのです。之を知つた諸國の尊攘は俄然動搖し、卿に對する反感は天誅を加へよと叫ばしめました。之と共に卿を推賞した出雲路の心中をも疑ひ、同志より除かんとするに至つたのです。

然して出雲路源三郎は、決してそのやうな疑ひを受けるやうな人物ではありません。彼こそ眞に盡忠報國の權化とも云ふべき人です。彼は田中新兵衛が一ツ橋慶喜公に謁し、攘夷の不實行をせめて違勅と罵り、慶喜公をして一言をも

鯖飯　北原白秋作歌　町田博三作曲　**紺屋のおろく**　長唄連中

紺屋のおろく　松園　三治郎　松蔦

第二部

一番目　**唐人お吉と攘夷群**　三幕八場

序幕　天城山の絶頂に近き深林
京都靈山叔阿彌の庭の一部
同　叔阿彌の奥座敷

出雲路源三郎　壽美藏
田中新兵衛　訥子
松浦武四郎　橘三郎
寺島忠三郎　駒之助
同志若侍　尾崎扇之助
同　翠屋鳳童
同　千岡魁三郎
同　若藤政之助
奉行組頭　岡田備後守　吉三郎
侍　伊佐新治郎　九團次
若徒仲間　大ぜい
小路公知卿　魁福
姉勝麟太郎　車助
齋藤お吉　松蔦

二幕目　京都嵐山の山道
同　坂屋の奥座敷
同　朔平門

發せしめぬのみか、ひたすら違勅の言葉に恐れ入らしめて立ち歸つた、彼は涙と共に田中の手を握り締めて叫んだのでした。「新兵衛、お主その時、有難いお國に生れたと思はなかつたか……兵力も財力も、德川は今、日本の主權者だ、朝廷は鎌倉以來六百年の御衰微にて、京都の一隅に御逼塞あらせらるゝ實狀にある。然るに、その德川の權威實力をもつてしても、違勅の二字に逆らふことが出來ないのは何故だ。邊國薩摩の貧乏侍田中新兵衛輩に罪人と罵られて、猶且つそれを罰し得ぬのは何故だ、これは、我々國民の信仰の發露なのだ。我々には、冥々の間に、皇室は如何なる場合に於ても、惡をなし給はぬといふ確信があるからだ。同時に、皇室は常に、正義の本源、眞實の發源地と信じてゐるからだ。國民が目を上げて皇室を見る時、其處に善がある、そこに眞がある。我々の失はれんとする良心が、そこに見出さるゝ爲なのだ判るか、新兵衛……」と。もとより新兵衛は熱情の士です。「判るとも、判るとも……」。出雲路は更に「我々はもう、皇室を單なる政治主權者として觀てはならない。又、お伊勢樣と同樣に、太々神樂を奉納して拜んでる時ではない、皇室は我々に一層親しく、判斷の根據、倫理の本源でなければならない。歷史の教ふる處に依れば我國過去の勤王運動は每も單なる政權爭奪の運動ではなく常に正義心の回復、倫理の擁護をもつて第一の目的としてゐた。我々が今幕府を倒さんとするは、德川が憎いから倒すのではない、臣下として君國を淺がんとする、その、不正不義を回復せんとするのだ……」。田中「おりやもう明日から三條の橋に坐つて、高山彦九郎だ……。」出雲路「此志の存する限り、日本國の燈火は消へぬ。例へ將來、時勢により時代に依つて、國民の一部がその方向をあやまり、國家を危きに致す事あつても、日本國は必ずこの思想の依つて救はれる。幾度誤られても、必ず正しくする。幾度轉んでも起き上がる。勤王とは何だ。曰く、天皇と共に善を成し遂げんとする日本人の熱烈なる希望なのだ…」と。

彼出雲路の赤誠心は此詞の中に充ち溢れてゐるのです。然して實狀は彼をして疑ひの雲を以て閉ざしてゐるのです。唯彼の清き心を知るのは、彼を兄の如く畏敬してゐる女川惣之助一人があるのみです。

女川は常陸鹿島神宮の神主の子で、酒の爲に家產を蕩盡した父から僞信國の脇差と攘夷の遺

出雲路源三郎壽美藏
女川惣之助龜酌子
田中新兵衛扇之助童
若尾千代之助
同翠崎鳳
同藤岡屋魁
同塚田政之助
同宮古豐三郎
同主殿兵衛九次郎
同重文七福笑
同兵衛福延
手代おりく太美
娘おいし若
女中おきく壽松
齋藤吉士光壽
同士太郎
從士吉村左京治
太刀持金輪勇福
下僕
長柄持延男
草履取九平
姉小路公知卿魁
出雲路源三郎壽美藏
女川惣之助龜酌子
田中新兵衛扇之助
松浦武四郎橘三郎
寺島忠三郎駒之助
薩摩屋敷留守居役
奉行所與力吉井幸助
齋藤お吉山扇吉三郎
松蔦

大詰　京都七條田中新兵衛の隱宅　近江の國粟津の松原

志を殘され、父の遺言を體して攘夷の爲に働いて居るのでして、常に同志の間で已は遺言攘夷だと放言して居るのですが、其爲に斬られないのは彼の一つの人格に依る事でせう。女川には鋭い觀察力と深い同情心があり、戀する男心にも充分理解があつたのです。

出雲路は姉小路卿の變節の因はお吉にあるのだと知つて、惱み悶へました。物事を眞直に單純にしか考へられぬ田中新兵衛は、直ぐにも姉小路卿を斬らうと云ひます。然し出雲路は極力之を制するのでした。出雲路にはどうしても卿に向ける刃はないのです。是は同じ尊攘論者でありながらも田中、出雲路の間には其考へに大分の相違があるのです。田中等は唯々攘夷一點張ですが、出雲路は攘夷の到底不可能なる事を知りながらも、倒幕運動の手段として、此際どこまでも攘夷熱を鼓吹しなくてはならないとして居るのです。されば、出雲路は卿が開港論に傾かれたからと云つて、決して是を變節とは思はないのです。是こそ卿の思想が進歩したのだ、と心嬉しくさへ思つてゐるのです。とは言へ、是が爲に朝議が開港説に決しては、倒幕の實は又何時の世にか擧げ得られるか分らなくなるのです。是が非でも攘夷を唱へねばならないのです。彼は逸る田中を强て制しなだめ、今一度姉小路卿を訪いて開港説を捨てさせよう。而して、涙を振つて初戀のお吉を國家の爲新日本建設の爲に斬捨てんと決心します。

京都老ノ坂屋の奥座敷

一生を賭ての戀、其戀人を、御國の爲に我が刃にかけねばならなくなつた。出雲路源三郎、彼は暗い思ひを抱いて重い足をお吉の宿へとはこびます。然しお吉の艶な姿を目の前にしては、固い心も自とにぶつて來るのでした。とう〳〵思ひ餘つてお吉に戀をうち明け樣とします、お吉には忌まはしい過去があります。彼女は純眞な出雲路と戀を語るには、餘りにも自分は穢れ過ぎてゐると云ふ事を知つて居ります。彼女は「……お吉には人の知らない惱みがあります……いえ、恥があります。恥を隱して人に愛されるほど……女の身には辛い悲しい事はありません……」と云ふに云はれぬ下田の夢を、胸に祕めて泣くのでした。多感なる天下の志士出雲路も戀を斷つ刃はなく、戀と國事の板挟みとなつて悶へるのでした。其處へ姿を見せたのは、慷慨の士田中新兵衛です。田中は出雲路に、今宵愈姉小路卿が御前會議に列すべく、

中幕 重井筒 一幕
徳兵衛 ふさ

萬年町紺屋の内 同 四ツ辻

紺屋徳兵衛 福團三郎 助次郎
吉口屋宗右衛門 扇政之助
文字入 治郎 成福太郎子男蔦車
同手間取 喜三郎 兵衛 小市太郎 竹繁 福松 魁
丁兒 お辰
一下女 お房
人置屋の女 お女

大喜利 勢獅子 一幕
山王祭禮の場

鳶頭 龜蔵
同 由長 松蔵
同 島長 扇治郎
同 房次郎 龜三郎
同 新吉 松五郎
同 爲太 美國五郎
同 藤吉 蔦紀
同 三代吉 納豐
同 與三 延
同 秀松 福
同 伊六 喜太郎
同 三平 登
同 三次郎 喜助
同 吉江
同 松藏
同 内の世話人

参内された旨を告げ、若し此爲明日にも開港許しの勅諚が幕府に下れば、志士多年の苦心は何となる。何故自分に姉小路を刺さしては呉れなかつたか、と涙と共に亂打するのでした。新兵衛の一言一句は針の樣に出雲路の胸を刺します。何事かを深く決した彼は、新兵衛の大刀を取持ち「……わしは新兵衛の命を命として行く……」と、此一言を殘して何處へか……。入れ違ひに駈け來つた女川は、お吉の無事な姿を見るなり今出雲が血相かへ、公卿門の方角を聞いて走り去つたが扨ては姉小路卿を彼の手で……と察すると共にお吉から「出雲路さんは、お吉の身を切りたいが切兼ねた、と仰しやいました……」と聞かされ、彼の眞情を思ひ遣つて泣き、且つ、理路整然と田中新兵衛の非を説くので、田中は初めて出雲路の心情を知つて頭を垂れます。

同　朔平門

時は文久三年五月二十日の夜も亥の刻過ぎ、朔平門外の眞砂は國事參政姉小路卿の血潮をもつて染められました。後に取殘された一振の大刀。それは薩摩物と鑑定されます。下手人は言はずと知れた出雲路源三郎です。兇變一度傳はるや朝廷並に守護職の驚きは一方ならず、嚴重なる犯人逮捕の命が發せられましたが、其場に殘された刀によつて犯人は大體薩州人と目星がつき次いで土佐脱藩士那須信吾の證言から、刀の所有者は田中新兵衛と判ります。

京都七條田中新兵衛隠れ家

一方兇變後幕府の浪人詮議は嚴を極め、田中は表面お吉を妻と僞つて大佛の傍に身をひそめる事にしました。又出雲路は瀨田に忍んで居

藝同　市玉
同　龜
同　松延
同　代福
同　次郎
同　小おおおおたかすきつ
同　駒之助
同　太郎
同　之助
同　藝童
同　福寿
同　美若

松竹

家庭劇　浪花座

畫十二時・夜五時半二回開演

館直志作

第一街の谷底　一幕

或るビルディング街

帽子洗ひ屋　天澤照
ノータイの男　大澤浩
課長級らしい男　高安光雄
オフイス・ガール　市川多喜子
近眼の會社員　京之助
撒水夫　森田義雄
ライターを持つ社員　加藤桂二郎
髭のある會社員　左久馬
和服の男　喜鐵彌
青年の友人　澁谷天外
タイピスト　村田滿智子
帽子洗ひの嬢　春野晉羽
青年の戀　春日惠美子
その女　橘郁代
老紳士　元安豐
若い母　浪花千榮子
妻　中村井正雄
を連れた夫

りましたが、同志の爲にと企てた事から却て幕府の警戒を厳にせしめて、同志に迷惑を與へる樣になつた事で心を痛め、又取殘した刀の事から類を田中に及ぼすを憂へ、自訴せんとしますので、今や全く出雲路の眞情を知り盡してゐる田中には、それが痛ましくて堪まらないのでした。彼は如何にもして此難から出雲路を救はんと決心します、それにはお吉に彼の將來を託して、一先づ此煩はしい政爭の地から彼を遁けしむるに如くはないと思ひました。そしてお吉を瀬田なる出雲路源三郎の許へ送り、來る可き新時代に活動の出來るやう、二三年靜かな下田邊で西洋の書物でも讀ましてやつて呉れと頼みます。

田中新兵衛も亦血あり涙あり薩南の健兒です。刀を證據に暗殺の事實を問はれた時、手を下せるは自分ではないが刀は正しく自分のもの「この刀が姉小路を切つてゐるのだ、是丈けの事實に間違ひはない」と、腹一文字に掻き切ります。

近江國粟津の松原

漸く暮れんとする琵琶の汀、小川の邊に佇む旅姿の三人があります。唐人お吉と松浦武四郎、それに出雲路源三郎です。お吉は田中の言葉に出雲路を伴ひ下田へ下る途中、松浦武四郎は諸國を遍歴して今京に歸らんとしてゐるのです。松浦は呉々も源三郎の事をお吉に頼み、急いで京へと別れ行きます。出雲路は松浦や田中の詞は泌々と嬉しく感じますが、此國事多端の秋、已一人が安住をむさぼるのを本分とせず、從つて下田行きも澁り勝ちであります。

下田時代の暗い過去を嫌はれたものと誤解してお吉は、云ひ知れぬ腹立たしさがこみ上げてくるのですが、それはお吉の思ひ過ごしで、出雲路はその怨み言を一笑にふし、下田へ急ぐ事になります。折柄、姿を見せた女川が田中最後の有樣を話します。そしてこの煩らはしい政爭にうみ果てた彼女川は、故郷水戸へと歸つて行きます。

田中の死によつて出雲路の心は亦も亂れます。死んだ田中の分も働かねばならぬ自分ではないか、と心を決めた出雲路はどうかお吉に別れてくれと頼みます。お國の爲と言ふ言葉で踏みにじられた私です。どうか一緒に歸つて下さい、どうしても別れるのは嫌ですと言ふお吉。けれども出雲路に諄々と眞心こめて說かれて見れば、遂にあきらめてお吉は淋しく唯一人吾妻の旅に立つて行きます。

その洗濯屋　柳谷　勝本　武子雄

第二　炭燒く男　一幕

茂林寺文福作
土田新三郎脚色

或る山中の炭燒小屋

山の娘　大久保左馬助
登山者　甲野乙村
同　京之
隅田　初子
乘合運轉手　樋口彌太郎
文造の妹　久東澁谷天愛
丸三タクシー主人　丸本江石致　河外
炭燒　西田文造　薫雄
郵便配達夫　十時吾彌
村の無賴漢　仙吉　山田隆
よか樓主人　傳八　天也
駐在巡査　大森　加藤桂二郎照

第三　新家庭讀本　三場

門脇陽一郎作

第一　松元久の家
第二　喫茶店いちじく
第三　元の久の家

松元久の妻　中邦子　小織桂一郎
息　たつ　橘郁代
松　きみ子　石河薫
美代の弟　一夫　山田隆
元　文也
出　久　高田亘子
林　美代　東愛
きみ子妹　枝　春野音羽
ふじ

大森痴雪作同舞臺監督
吉川觀方衣裳考案

一番目

紅蓮の都

三幕
五場

松田種次舞臺裝置

中座九月上演

足利八代義政將軍の時代は實に暗澹たる世相を現出した、武將といふ武將は權勢爭奪の爲めに盛んに私鬪をやり、これを抑へやうとする幕府の威令は更に行はれず、たまく山名宗全細川勝元兩大勢力の間に葛藤が生ずるに至つて終に應仁の大亂を醸成してしまつたこの戰に參加した大名は近畿四國中國九州と少くも全日本の五分の三にも及んだ、東陣と西陣、相對抗する都洛の合戰を中心としてやがてはそれ〴〵の領國にまで波及し中國では大内氏を中心とする爭ひ、九州では島津菊池氏等を廻る戰ひといふ有樣。

上は統制の力なく、人は道義の念を失ふて只管に私利私慾をのみ逞しふする結果が如何に國民を苦しめ世を擧げて墮落のどん底に沈淪せしむるかを如實に物語るこの應仁の亂勃發の眞因に就ては素より複雜極まりなき因果關係を有つてゐるが就中一婦人の極端な母性愛がその最大

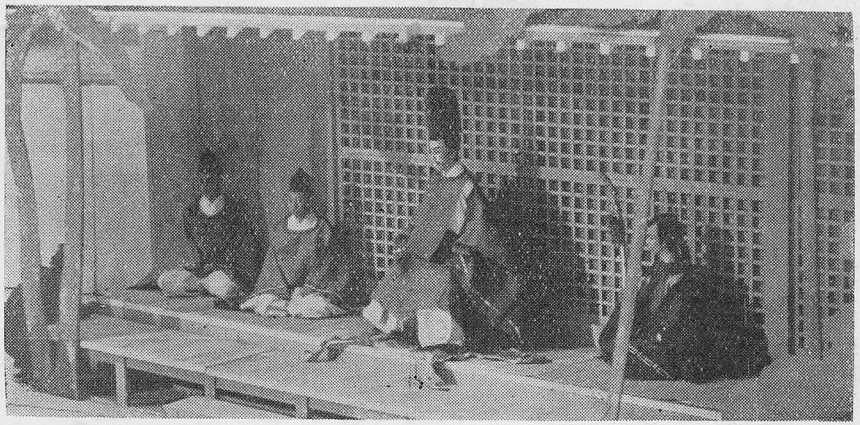
マダム春代　浪花千榮子
客　同　加藤桂二郎
給仕　美枝子　BA　村井正雄
同　一三　淺妻明子
同　久の同僚　小杉一　小東照子
同　西川雄作　左元安豐
同　田中治　京久馬
洋食屋　出前持　時之助　彌

第四　沖の鷗　三場

和田九里作
土田新三郎脚色

第一　小豆島の或る村落氏神の境内
第二　醤油釀造元宮崎の店先
第三　夜明けの汽船發着所

村の青年　孝吉　京之助
同　秀太郎　儀一　喜鶴彌
同　踊り見物の村人　A　大鐵
同　B　谷本武雄
同　C　森田義雄
同　踊りの娘　一　柳勝子
世話焼　又助　村田滿智子
市川勘平　小天照
宮崎吾作　十織桂一郎
踊の世話方　八致雄吾
宮崎の娘　石河薫
市川の伜　澁谷天外
村の青年　勘三郎　加藤桂二郎
村の娘　彌三郎　春日惠美子
同　踊りの娘　種　小東照子
同　娘　東條光子
淺妻明子



原因であることを見遁すことは出來ない。

將軍義政、家を嗣ぐべき子なき爲め、出家して淨土寺にある弟義親を還俗させ後日我が子が生れるとも必す出家させるといふ言質まで與へて將軍後繼者と定め、管領細川勝元を其後見役とした。所が間もなく御臺所富子夫人の腹に義尙が生れた、夫人の心には忽ち煩惱の猛火が燃えさかる、管領勝元に取つて一大敵國の觀がある。山名宗全の許へ密使が飛ぶ、宗全は欣んで若君推戴を誓つた、恁ういふ場合一切の解決は唯武力に據る、勝元方宗全方と兩分された西日本の勢力は無二無三に京都へと集中された。

兩軍干戈を交へること實に十有二年、宗全の病死に亞ぐ勝元の卒去によつて戰亂漸く終熄したが、都は文字通りの燒野原となり、幾千萬の生靈は灰燼と化し去つて、茲に初めて夫人の目的は達成されその子義尙は九代の新將軍として天下に臨んだ。然し當然の結果として夫人には自ら播いた種を自ら刈らねばならぬ秋が來た。何物も遁れることの出來ぬ因果の理法、夫人はそれをどう解決するか、紅蓮の都はこゝに大詰の幕を閉ぢる。

勇三の妻　春子
村の助役の妻　橘郁代
吉田の妻　君子
下男　石時久
源助　左馬彌
おその兄　勇三　山田隆也
村の娘　玉　春野音羽
村の子供　文吉　文童
宿の客　引　大澤浩
旅行者　夫　高安光雄
同妻　市川多喜子
村の男　庄太郎　村井正雄

第五　新祇園小唄　一幕

川竹五十郎劇化
若柳吉兵衛振附

鴨川の夕涼の床

踊子　大田亘
加納順之助　高田愛子
舞妓榮　東春野音羽
仲居おすが
青年丘文夫　十時谷本武外雄
若い者留吉　時谷天彌吾
同三吉　谷天外
加納の番頭忠助　澁谷天外
舞妓はん　浪花千榮子
藝者小秀子　村田滿智子
舞妓菊　春日惠美子
同　石上初子
伯父順兵衛　小織桂一郎
仲居おつぎ　柳滝子
丘屋致雄
アイスクリーム友人　澤田實　安豐

重井筒

大澤休象

□□□□□□

◆日本一のはまり役

福助君と、魁車さんのコンビネーションで、心中重井筒。配役はどうなるか、まだ聽かないが、先づ、福助君の、德兵衞に魁車さんの、「おたつ」ときては、てんと堪らぬ、日本一の欲り役であらう。

◆羽織落し

女房　お辰が、生薑酒して待つといひ、可愛い、お房が、どうぞ、銀の首尾なつて、玉子酒飲む樣に仕度い事ぢやと歎いたのを、氣遣ひすなとなぐさめて置いたが、氣の弱い女だから、もしや、あゝ、どうしやう？　と、辻を越えては又戻り、辻に立つたり、蹲ふたり、ツト起ち上つて、ひよろ〳〵〳〵。羽織の立り落ちるも知らず、放心狀態になる。名高い「しぐさ」情に脆く、色つぽいところは、何と云つても、福助君のもちあぢが光る。

◆變つたストーリー

お房は京の生れ、幼い時に、大阪島の内、六軒町へ賣られて來て重井筒の抱へ遊女となり、亭主の弟、紺屋へ聟に行つた、德兵衞とふかく名染、今度は、親が二重賣の詐欺を働いた手詰の銀を男に賴んだ、その銀故、遂に情死をするといふ。陰慘な境遇に泣く遊女の中でも、親を思ふ孝心と、惚れた男と添ふに添はれぬ三角關係、お互に生れ替つたら、本妻定めぬ其先きに早う女夫になりませう。といふ、優しく美しい、性根こそ、魁車さんに、うつてつけの役どころである。而しこの役割をとりかへても亦別な趣があらうと思ふ。

◆隱居宗德の言葉

一寸、誰れも氣のつかぬ事だが、お辰の父親、隱居宗德が、守錢奴ぶりを發揮する科白の端に

おれらが談義參りして、一文投る賽錢さへ、進ぜうか、進ぜまいかと、疊算置て見て、たとへ算が合ふても五度に三度は投げずに仕舞ふ。傍に居る同行衆がぐわら〳〵投る時には錢を一文摘んで片手をかゝ振り上げ、投げる顏で、鹽の長二郎、錢は手に止つた。かう氣轉を利かせねば過ぎにくい身代云々とある。右、鹽の長二郎といふ言葉に就て、從來あまり解釋をした人も無さ相だから、ホンノちよつびり記るしてみよう

◆生きた馬を呑んだ鹽屋長次郎

芝居では、この科白が無いか知らぬが、近松門左衞門の戲曲に、鹽の長二郎とあり、私の見た本には鹽屋長次郎。大阪の手品師で、江戸まで行つて、興行した。その長次郎が、生きた馬を呑んで、馬子が、その馬を返へして呉れと談判に來る。それに或る、飯綱使が絡まつたいきさつが、享保の頃、大阪で芝居になつた。之れを委しく書けば面白いが、脫線は禁物、この邊で筆を擱く。(一九三二、八、一九)

洋酒界の革命兒……國產洋酒の逸品

國產金鶴印

ウヰスキー
ブランデー
ベルモット
キユーラソー
ペパーミント
滋養葡萄酒

元賣發
株會社 横山商店
大阪市東區豐後町參番地
電話東(94)一六六一 三一〇二 九四六四

重井筒

おふさ徳兵衛

中座九月上演

年の瀬も稍押詰つて、けふは師走の十五日である。徳兵衛は、島之内六軒町の娼家重井筒の主人の弟であるが、縁あつて此の紺屋へ入聟となり今では女房お辰との間に小市郎といふ幼兒さへあるに、きのふも今日もおのが實家の重井筒の抱女郎お房とは生命をかけて契つてゐた。

十歳の年から重井筒に身を賣られたお房の實家は、京都にあるが父親は或人の請判に立ち其のため十二月十六日中に是非とも返濟せねばならぬ金、しかも若し工面が出來ねばお房の身體は京都へ連れてゆかれねばならぬのである。

徳兵衛は貞實な女房お辰には祕密に、金の工面に心を碎いてゐた。

我家に歸つた徳兵衛は、折から女房の不在を幸ひに、店のものに夫れ〳〵用事をいひつけて外出させ、さて豫て諜し合せた一人の女年恰好から見て自分の女房として不釣合でない女を、密と奥の間へ伴ひ入れた。やがて黄昏て訪づれ來たは金貸の代人堀江の治右衛門である。先づ〳〵と奥へ通して、

「コレ女房共一」と引合すと、女は巧妙な口前に女房振りを發揮した。

スツカリ手段に乘つた治右衛門

「サア判をなされよ」と用意の借用證書に徳兵衛夫婦の印形を捺させ約束の丁銀四百目を渡した。

兎にも角にも目的の金子を懷中にした徳兵衛愚しい丁稚三太に店を留守させ、女を連れていづくへか出てゆく。

× × ×

十五夜の月は丸いが、心に憂愁を包みながら、幼い小市郎をつれて、鎗屋町の姉の宅から歸つて來た女房お辰は、盆の踊の時の疊を

着たまゝ眠入つた幼兒を寢かしつけて、さて四邊を見れば、押入の中には掛硯が開けたまゝ、大切な夫婦の印判が取散らかされてゐた憐悧なお辰の胸には恐ろしい波が打つた。

店はと見ると、丁稚の三太ばかり。「コレ三太」呼びつけて密と聞くと、自分の思ひ浮べたことが、どうやら事實でありさうである。

美しいお辰の眉は顰んだ。

折から店頭に聞こえたのは、聞き馴れた父の聲、それが平素より腹立たしげに耳に響くのであつた。お辰の父は吉文字屋宗德といひ、一文の錢を二つに割つて使ひたいほどの儉約人、二人の娘に財産も家職も分けて、今は隱居の身の上である。

「お年召して、このお寒いのに、今どろ」とお辰は、おど〳〵と父が立腹の仔細を聞くのであつた。

さて父の話を聞いて見ると、今の先、堀江の治右衛門といふ男が來て、德兵衛夫婦の連判で丁銀四百目貸したが、念のため貴方のお耳へ入て置く。一體何のための借金かと、それは〳〵一方ならぬ立腹。

お辰の胸には、お房僧やと思ひも湧かぬではなかつた。しかし連れ添ふ良人に對する愛は深かつた。

「何の私等夫婦が借錢しませうぞ。その金子は、島之内の兄御、アノ重井筒で、よい奉公人を抱へるため入用で、ほんの暫らく融通のために借りてあげたもの。兄弟のことに判を押すのは世間への義理」と、巧に老人を慰めた。

が、老人の立腹は尚殘つてゐた。

「聟どのは何處にじや」

「アレ暖簾の彼方に寢てゐられます」

と幼兒の寢姿を指さすと、家を外に德兵衛は今日も不在と信じてゐた老人の眼に、その寢姿——盆踊の時に着た奴天窓の聟が、不思議にも子供とは見えなかつたのであつた。德兵衛は、その以前から歸つてきて、虎落——染物屋の物干の蔭から、密と我家の樣子を伺ふてゐた。

雪駄履の宗德老人は、しぶ〳〵歸つてゆくと、入れちがふて德兵衛、走せ上つて、女房の膝ちかく居丈高になつて

「コリヤ、いつの間に姦夫を引き入れた」

と、奥の間に飛び込み、胸倉つかんで引起せば、これは〳〵、思ひもかけぬ我子の小市耶。

手持不沙汰の德兵衛の顏つれ〴〵と眺めてお辰は、はふり落つる涙の隙より、思ふさま心一杯、道理せめで、情も深く、千々の思ひを述べた。

惡人ならぬ德兵衛は、理の當然に責められては、双向ふ白双はなかつた。

「……和女、子供それに隱居のため、兄貴の身の上、我身のため、房が後のため、プツツリ思ひ切つたぞ」

と懷中から先刻の丁銀四百目、其所に投出して、

「これは明日直ぐ治右衛門に返すことにして以後一切、房とは往來すまい」

と、悔悟の色が顯はれたお。辰は心からの喜び、

「それでは大儀ながら、ちつとも早う其のことを隱居の父へ聞かせて下さい」

「よし往て來やう」

と德兵衛は出て行く……。

『心中浪華春雨』

岡本綺堂

九月の中座には「心中浪華春雨」が出るさうです。これは私の作のうちでも、比較的に屢々上演されるもので、その都度、種々の雜誌に何か書かされてゐるので、今更改めて云ふ事もないのです。

たゞ一通りのことを申上げれば、これは大正四年一月、本郷座初演。その當時の役割は左團次の赤格子九郎右衛門、中車の親方庄藏に又五郎の六三郎、松蔦のお園等でした。

私はこれまで二百種に近い戯曲を發表してゐますが、チョボ入りの狂言は甚だ少く、先づこの「浪華春雨」が筆始めで次が「鳥邊山心中」次が「唐人塚」——以上三種に過ぎないのであります。一體

六三お園『心中浪華春雨』

おほむ石

・・・九月中座新裝記念興行上演・・・

（その一）

お園　ほんに子供とて油斷がならぬ、ふたりの樣子を覺つたさうな、丁稚なればこそよけれ、もし親方さんにでも覺られたら何とせう、えゝ、まゝよ、どうぞこゝまで來たからは、もし六三さん、わたしは内へ上るぞへ。

緣に腰をかける

六三郎　はて、待ちや、待ちや、もしや此處へ親方が……

お園　ことし十九と云ふ若い男が、なぜそのやうに氣の弱い。

おそのはじれて駈け來り、六三郎の手をとりて、無理に内へ引上げる。

お園　親方ばかりが怖ろしうて、わたしがおそろしいとは思はぬか、親方に叱られても多寡が勘當で事は濟む。わたしに心から恨まれたら、どうなることぢやと思はんす。

〽ふたつも三つも年上の女子に深く思はれたが、おまへの因果とあきらめて、如何なことでもあいあいと素直に聞いてゐやしやんせ。

お園　もしもわやくを云ふならば炎据えるは未だなこと

〽わたしの此手がある限り打つてたゝいて、抓つて突いて、吃と仕置をせにやならぬ

お園　そのとき泣いても堪忍せぬぞえ。

〽痴話も口説も年下の、弟を叱るごとくなり

六三郎　その樣に叱つてたもるな、幼いときに親に捨てられ、十歳の年から今日が日まで、こゝの親方のお世話をうけた。御恩を

わたしは淨璃瑠を書くことが不得手ですから、これまで殆ど舞踊劇などに筆を着けたことが無いのですが、この「浪華春雨」なども淨璃瑠物といひ、殊に最初の試みですから、どうも思ふやうに書きこなせず、何だか人形芝居のやうな趣になつて仕舞ひました。

又五郎の六三郎は初演だけで、その後はいつでも壽美藏が勤めてゐますから、松蔦のお園と共に二人の持役になつて仕舞つて、東京に地方に幾たびか繰返されてゐます、したがつて、どの人もすつかり手馴れて、些つとも危なけがありませんから、舞臺上の成績は受合ひです。そこで、作の價値――何分にも十七八年前の作ですからと、卑怯な逆げ口上を云つて置きます。

初演のときには「心中」が警視廳の許可にならず、單に「浪華春雨」として上演したのですが、その後は「心中」御免となりました。併し此頃のやうに心中流行では、再び「心中」禁止になるかも知れません。（八月十九日記）

仇に思はれうか。來年でなうては年季もまだ明けぬ丁稚あがりの身の上で、遊女狂ひなどすることが、もし親方のお耳に入らばなんと云ひ譯が出來ようぞ。かういふ中もひよつと誰かに見付けられはせまいかと、わしは胸がどきどきする。

左右を見て、

お園　どうして來たとは知れたこと。このごろは半月ほども打絶えてたよりも聞かねば、どうしたことかと氣も濟まぬ、けふは客衆に連れられて、南の芝居見物に行つたれど、舞臺を觀るのも上の空、氣合がわるいと嘘云ふて、中途から芝居をぬけ出し歸り途にそつとたづねて來ました、わたしとてもこのやうなことが旦那殿にきこえたら、吃と叱らるゝは知れてある。あぶない棧橋を渡るはお互のこと、苦しいなかの樂みとはほんに此事で御座んせうか。

（その二）

九郎右衛門　親はなくとも子は育つと、世のことわざに嘘はない。よう健やかに生立つたなう。

〽仔細知らねば薄氣味わるく。

六三郎　して、お前はどなたで……わたしに何の御用。

九郎右衛門　親子がわかれて十一年、途中で行き違ふてもそれとは知れまい。まして折柄のゆふ闇に、面體しかと分らずとも、九歳の年まで聞きなれた親の聲音は、耳の底にも殘つてゐる筈、今さう名乘るも面目なけれど、名乘らでは濟まぬ父の九郎右衛門わが子の安否をたづねて來た。

六三郎　え、そんならおまへが父樣か

〽おなつかしやと取り縋る、血筋のまことは千行の涙、

この中、ひとりの捕手は門に來りて内を窺ひ、うなづきて去る

六三郎　なにはともあれ先づ〳〵これへ……

〽つきぬ親子の緣先に、九郎右衛門は腰をすへ、あたりを憚る聲をひそめ

九郎右衛門　謄太く生れたが身の仇、十露盤はじく眞面目の商賣もかしく、堂島の米商ひにぬれ手で粟の目算はずれ、女房を捨て、子をすてゝ家出したのは十一年の昔、四國西國の果てまでさまよひ歩きしが、生れ故郷はなつかしく、わが子には逢ひたしこの頃ひそかに大阪に上つて色々に手をまはし尋ぬる處、せがれは大工の親方庄藏ど

のに拾はれて無事に奉公してゐるとの噂、聞いて心は飛び立てども、おもてむきに名乗つて來るも面目なく、豊よりこのあたりを徘徊して、そなたの出入を窺ふうちに日も暮たり、そこらに人もなし、今この時と聖をかけて初めて親子がめぐり合ふ。これも盡きせぬ緣でかな。よくも達者でゐてくれた。

（その三）

庄藏　やい、日本で指折の大福長者とか云ふお人この繪姿を鏡として、おのれが生き面を寫してみよ。赤格子九郎右衛門といふ海賊の張本、長崎奉行の目をのがれて、この大阪にまぎれ込む。見つけ次第に訴人したら、銀二十枚の御褒美を下さること、繪姿までも添へて、きびしい御詮議を、知らぬは迂濶か大膽か、兒飼ひから仕立上げて足かけ十年、わが子のやうにも思ふ大事の弟子にそのやうな親が持たれうか、海賊の子と呼ばれうか。親の恥は子の恥、弟子の恥は親方の恥、我子に連坐の罪が着せたいか、親方の面に泥が塗りたいか、恥を知らば早く歸れ

〽疊たゝいて罵れば、九郎右衛門びくともせず

九郎右衛門　いかにも親方推量の通り、われ等は赤格子九郎右衛門、海賊といふ名は負ふたれど天道も佛神も照覽あれ、人の物びたひらなかり目をかけた覺えござらぬ、國法を破つて唐人船とあきなひした。それが重き罪科ときはまつて、詮議の由は薄々聞いたれど、博多の住居は假の宿、われ等がまことの住家とするは日本の土よりも百千倍廣き海の上、東より追へば西にかくれ、北より向へばみなみに走る。長崎奉行などの手ではいかないかな彼等が如何に立騷いでも、所詮及ばぬことゝ多寡をくゝつて今まで安穩に日を送りしが、わが子の愛に心ひかされ、うか〳〵と故郷へ立戻りしは九郎右衛門が運のつくる時節、水の上ならばいかなる網をも破つて逃ぐる法もあれ、陸の上では鯨や鮫も蟲けらに劣る。八方の出口〳〵を取り卷かれ、繪姿までも添へて詮議に合ふては、のがるゝ隙もござるまい唯今聞けば、九郎右衛門を訴人したる者には銀二十枚の御褒美を下さるとや、とても助からぬ網の魚ならば、他人の獲物とならうよりも、親方の手料理に逢ふがせめてもの恩報じ、大事の命を進上申す、いざ縄打つて引立てめされ

〽腕を廻して眼を瞑づる

庄藏　えゝ聞き分けのない男よな。褒美の金がほしければ、そつちで望むまでもなく、こつちで疾くに訴人する。慾に眼が眩れわが弟子の、親に縄かくる庄藏と思ふか、見損じられたが口惜しい、赤格子九郎右衛門は六三郎の親といふこと、上にも既に御存じなればこそ、けふも町會所へよび出されて御詮議受け、この繪姿までも渡された。そこへうか〳〵訪ねて來るは、穴を這ひ出る狐も同樣、わが子と云ふ餌に引かされて罠にかゝるとは氣が付かぬか、早く歸れと云ふはこゝのこと。生國の大阪で召捕られては、六三郎の恥になる、わが子に後指さゝすが親の慈悲か、わが子を日かげ者にするが親のなさけか。こゝの道理を合點したら、天竺南蠻蝦夷松前、遠いところへ勝手に行け。

〽齒ぎしみしてぞ叱りける。九郎右衛門はつと手を支へ

九郎右衛門　あゝ、恐れ入つたる親方の御意見この大阪で召捕られては親方の恥、わが子の恥、そこに心が付かざりし無調法、どのやうに叱られても一言ござらぬ。なるほどこゝは劍の中、片時も早うお暇申す。六三も堅固で、親方大事に奉公せい、もう此の世では逢はぬぞよ。

（その四）

お園　胸にひゞくあの音は……

六三郎　修羅の攻太鼓を聞くやうな

お園　（傘をすぼめてあわたゞしく駈け戻る）六三さん、あれ、あの音は冥土の迎ひ……

六三郎　え。

お園　わたしも一旦は勤めたものゝ、おまへを江戸へは遣りたうない。いとしい男を他國へ遣つて、たんと苦勞をさせるよりも、やつぱり二人が離れずに……

六三郎　とは云へ、大阪におめ〳〵と……

お園　居られぬところに居るには及ばぬ、ふたりが安々と住む國は、もし。

〳〵いだき寄せて囁けば

六三郎　そんなら二人が今宵をかぎり……

お園　未練はないか。

六三郎　なんの、生きてゐたからう、そなたと連れ立つて行くならば。

〳〵地獄の底も厭はじと、身づくろいして起ちあがれば、こゝろも空も暗き夜に、修羅の太鼓のたち〳〵と、冥土の迎ひぞ迫り來る

四方にて太鼓の音はげしくきこゆ。

お園　あれ、あれ、又もや太鼓の音。邪魔のない中、ちつとも早う。

六三郎は納屋に走り入りて、小さき鑿を持ち來る。

六三郎　大工の弟子には相應な（鑿をみせる）

お園　そんならこれで……

六三郎　おその、來やれ……

お園　あい……

六三郎　（おその手を取る）あの太鼓は父樣の命をちゞむる音。ふたりもあの音を聞きながら……。して、これからの死場所は……

お園　どこへ行かうぞ、六三さん。

〳〵淨土は西と聞くからに、行く手は西よ西横堀、うき名を流す、血をながす、戀の末こそ哀れなれ。

寫眞銅版
亞鉛凸版
プロセス平版
多色刷原版
電氣版

◇技術優秀價格低廉◇

大阪市東成區大今里町五五九

吉谷寫眞工藝所

電話東一五七一番

◇期日迅速正確◇

魁車と福助

西尾福三郎

似た者夫婦と云ふ言葉がある。

役者の組合せが、この似た者夫婦、或は似た者親子、その他似た者同志の一座になる事は餘り感心した話ではない。

數學の上では1＋1＝2になる事は間違ない事實だが、この似た者同志が一座した舞臺に於ては、往々にして1＋1＝0と云つたやうな妙な結果さへ生じてくる事がある。

それと反對に似ない者同志――と云つては語弊があるが、つまりお互に長所を發揮し合ひ、同時に短所を補ひ合つて行けるやうな異つた特色を持つた者同志がうまく一座した場合には、時とすると1＋1の＝が3にも4にもなる結果が敢て珍らしくない。

この良い方の一例は菊五郎吉右衞門のコムビであり、悪い方の一例としては鴈治郎延若のコムビを擧げなければならない。

然らば福助と魁車との組合せは何うであるか？

その結論は示す迄もない從來の成駒家一座に於て既に試驗濟である。

或人は云ふかも知れない。いつも成駒家の二人女房の觀ある魁車と福助は、お互に餘りに似た物を持ち過ぎて居はしないだらうかと。

併しそれはあく迄御大鴈治郎中心の場合のみの特例であつて既に去る六月この二人のコムビ「破れ三味線」に於て何度目かの良い結合を見せてゐる。

そしてその前月には二人に扇雀を加へた一座で魁車の「大森彦七」福助の「忠兵衞」二人の「乳母爭ひ」その他を持つて地方を巡業してゐる。

この一座が單なる當座の間に合せではなく、やがて確實な永久性を持つであらう事は近き將來に於て期待される所である。

成駒家傘下に於ける福助魁車の舞臺を知り盡してゐる人々は

或は今後の二人だけの顔合せに從來以上の特別な興味を持ち得ないと云ふかも知れない。成程、鴈治郎を本尊とした一座にあつて常に兩脇侍を務めてゐる二人だから、これだけでは中心人物が拔けたやうな氣がせぬでもない。

併し前にも書いたやうに一を三つ寄せて必ずしもその和が三にならないのが役者の組合せである。

だから、今日迄の限られた世界から解放された魁車福助が、思ひのまゝに自己中心の演し物を携へて眞の飛躍を示すのは寧ろこれから後であると云へない事もあるまい。

二人共女形としてはそれ〴〵華やかな一時期を劃して既に第二期に入らんとしてゐる際である。

かつて關西劇壇に出發を同じくした三人の子役があつた。子役の年齢が終ると共に、この三人は何れも貧けゝ劣らずの最貧連の聲援を後ろ楯に、それ〴〵美しい女形として賣出した。

後年の雀右衛門、福助、魁車の三人がそれであつた。

その内女形が專門の雀右衛門が先づ夭折した事で、それと共に、一時に關西歌舞伎の滅亡が來たやうな淋しい氣がしたものだつた。

純粹な女形を持たぬ歌舞伎は茲に於て既にその生命を半ば失つてしまつた譯だが、魁車と福助は純粹な女形でない許りにお互が寄つて一座を組織する運命を持つやうになつた。

それにつけても惜しまれるは女形三幅對の内雀右衛門の缺けてゐる事である。

三幅が双幅になつたが、この双幅は女形の外に立役も二枚目もやれる人である。

今にして思へばこの二人の修業方法は極めて賢明であつたと云はねばならない。この二人は菊五郎吉右衛門のやうに、或場合にはお互に自分の役所と對手の役所とを取換へて破綻なく演じ了せる自在性をもつてゐる。

文字通りの福助魁車競演と云ふ芝居はボスター價値から云つても有意義であらう。

特に茲一年間新駒家の精進振りには刮目すべきものがある。

昨年九月中座に延若喜多村と組んで以來、十月は中座で猿之助と、十一月は中座で吉右衛門と、十二月は南座の顔見世で、本年一月は中座で鴈治郎、延若、宗十郎と、二月は中座で鴈治郎、延若、幸四郎と、三月は南座で鴈治郎、延若、吉右衛門と飛んで六月は中座で鴈治郎、幸四郎、吉右衛門と一座してゐる。

劇團未曾有の沈滯期、不況續きのドン底に喘ぐこの一年間を通じて、京坂の大劇場に歌舞伎がかゝれば必ず魁車の名を見受ける。

この調子で關西劇團に魁車時代を形造る日を待望したいものである。

私の川柳

食満南北

◇重井筒を原作通りにと云ふ注文があつた。私は原作通りに脚色した、イヤ寫した、原作にトガキをつけて、役者がするやうに、前の方の淨瑠璃の文句を大分にカットした。人形振を人間振にした方がと云つたのは研究會の席に極まつたので、私の手柄？　ではない。

羽織落すだけに大分な智惠がいり

◇尾山大尉が幻影を見て、天樂寺へ引揚げたと云ふのが面白いので、文樂の新作が出來たのである。三勇士とは違ふて、全部に髷を結はしても出來さうである。またさうした心持で描いて見た。

いくさにんと讀ましてほしい文樂座

◇演るか演らないかまだ極まつてはゐぬらしいが、私は新聲劇の爲にもこの「尾山大尉」の事を描いた。事實に近いのは文樂の「其幻影血櫻日記」よりは「まほろしの命令」の方がより以上である、殆ど九師團で公開された筆記によつたものである。いゝとか惡いとか云ふ問題ではない。

人形に眉を動かすだけの嘘

◇私は新築歌舞伎座の普請場を觀た。その何よりも舞臺に頗る忠實であつた事を激賞したいと思ふ、食堂や、スケートやエレベーターの爲の歌舞伎座ではない、歌舞伎座は何と云つても舞臺の歌舞伎座であらねばならぬ。

普請場で觀ても舞臺がよく目立ち

◇第十八回全國中等學校優勝野球大會は終始、投手戰であつた、ジッと坐つて心持だけが進んで行く芝居と、立廻り澤山の芝居とどつちが面白いか。何はしかれ大衆のファンは打擊戰を喜ぶのではあるまいか。よし通でない、皮肉でないと云はれても……。

又してもボールと野次る投手戰

◇新聲劇の女優諸孃がスッカリ入れかはると云ふ事である。面白いと思ふ。コテイしてゐると、どうしても「舞臺」そのものもコテイする、動きといふ事は進むと云ふ事である。

女優さんにまだ注文のある大向ふ

◇伊井蓉峰氏がなくなつた、何と云つても眞砂座時代の優を思ひおこす、鷗外漁史の「兩浦島」をやつた頃の美くしかつた蓉峰君を……

歳は歳樂屋かゞみの正直さ

◇時代は中の芝居までも椅子席にし、二部興行にも、大衆化し、グン〳〵新しくなつて行く、道頓堀に昔からのこつてゐるものは、もう芝居茶屋だけになつてしまつた、それさへ西洋樂器屋になり、西洋油繪屋になり、カフエーになつて行く。

シコロをばジャズにかへてく櫓町

◇要するにもう南北などの必要であつた時代は去つた。道頓堀のたそや行燈と一しよにとうの昔に引込むべき筈である。誰か身受けをしてくれる旦那、オツトパトロンはないかしら。

道頓堀を歩行く南北大きすぎ

本誌の年極め御購讀

日本唯一の演劇雜誌

「道頓堀」

趣味と研究を兼ねる

壹ケ年分3圓30錢。

色々の特典があります。

小爲替又は切手（一割增）にて御申込み下さい。

× × × × × × ×

唐人お吉について

『唐人お吉と攘夷群』三幕は、タウンセント・ハリスと別れた後、松浦武四郎に伴はれて京地へ上りました唐人お吉の、日本開國史の一面を彩る活躍振を描かれた眞山青果氏の力作であります。

お吉は下田坂下町の船大工市兵衛の二女で弘化四年七歳で村山お仙に引取られ、其處で種々と教育されましたが、安政元年十一月四日の大地震大津浪後、お仙も間もなく歿なりました。お吉が十四の年でした。

お吉は其以前から藝者に出て居りましたが天性の美貌に搗てゝお仙から女今川や女庭訓は固より伊勢物語、竹取物語、朗詠集等も教へられて居り、殊に藝事は天稟で、其美音から明烏のお吉と呼ばれて評判で御座いました其のお吉が日米外交と言ふ大舞臺へ引張り出され、幕末外交の犠牲となつて、米國領事タウンセント・ハリスの侍妾となつたのは安政四年、即ちお吉が十七歳の時で御座いました。

ハリスの侍妾問題は既に安政三年にもハリスの強論に僻易した幕吏中から軟化策に持出されましたが、閣老阿部伊勢守正弘の反對で消滅致しました處、今度はハリスの方から侍妾の周旋を下田奉行所へ依頼して參りましたので、女でハリスの鋭鋒を幾分でも挫き、外交難の小康が得られるならば、と云ふ腹から老中には事後承諾を乞ふ積りで、無理矢理にお吉をハリスの侍妾に致しました。お吉侍妾の月日は明かでないが、公文書では安政四年五月二十四日に成つて居る想であります。

退引きならぬ義理の柵に縛られ、身も戦も魂も一切を犠牲にしたお吉が、其鬱憤を喋らす爲、酒に耽つて世を呪ひ、人を恨み、世を嘲ち、遂に悲惨な死を遂げました生涯の中二十一迄と二十九から晩年迄の事は、既に眞山青果氏が脚色されて、一昨年の八月、九月の歌舞伎座に上演されましたが、女盛りの二十二から二十八迄は傳記が不明であつた爲、是迄は脚色されずに居りました所、其の間、お吉が京都に居た事が判つて、遂に此『唐人お吉と攘夷群』が出來たので御座います。

安政四年にハリスの侍妾となり、ハリスが江戸へ移るにいたつて別れたお吉は其後、文久元年に江戸へ出て再びハリスに侍したが、僅に一二ケ月で下田へ歸りました。酒狂の爲に見放されたものらしく御座います。

江戸から下田へ歸つたお吉は、文久二年二十二歳で再び藝者になりましたが、間もなく下田から姿を隠しました。下田に寄港した松浦武四郎に伴はれて、お吉は京都へ赴いたので御座います。お吉の養はれた村山お仙が御船手奉行向井將監の屋敷に居ました關係から向井へ出入した松浦武四郎とお仙は相識であり、從つてお吉も松浦とは懇親でありました

梨園の古老

淺尾大吉

九月中座新裝記念興行には出演の豫定だつた淺尾大吉は福助、魁車の一座で四國巡業中病を得て、八月五日一行と共に歸阪後は南區千年町二七の自宅で靜養中急性黄疸に心臟痲痺を併發して去る二十八日午後三時二十五分永眠した。四國巡業中の「逆櫓」の權四郎「生玉心中」の親五兵衛「破れ三味線」の權六が最後の舞臺となつた、享年六十一——

本名は淺尾伴吉、明治五年京都に生れ八歳の時父大吉の一座で淺尾友吉を名乘り初舞臺十八歳の時關十郎を襲名當時の京都に於ける歌舞伎を牛耳つてゐたが、大正七年五月中座で故璃寛の名前替の時、四代目淺尾大吉を襲名、片岡仁左衛門の一座で仁左衛門の襲名口上に大吉は「大文字屋」の傳九郎と「中將姫」の大貳弘嗣に扮した以來成駒家鴈治郎の引立てゞ今日に及ぶ。大阪最後の舞臺は本年六月の東西合同大歌舞伎「やれ三味線」の熊公「勸進帳」の海尊「八幡祭」の念佛六兵衛だつたが、當り役は「逆櫓」の權四郎「熊谷陣屋」の彌陀六「四ツ谷怪談」の託悅等、延若とも一座すれば、我童、或は前記福助、魁車とも一座し何處へ行つても重寶がられた人である、昨年文樂座に同志座の旗擧げの時も自ら進んで若手連に交り大いに氣勢を擧げたなど既に故人を語る逸話となつた。

◆

京阪劇壇逸話集（其の一）

瀬川春江

吾れ知る事は人も知ると、古人の金言にもある通り、餘り物知り顔も出來ねども、是れも親の餘光とも申す可き、只前言致し置くは年代の前後、並に餘談にわたる點は御用捨を願ふ。

物知りもおのがあたまの七光り

當編を執筆するに當り、餘りにも深く感ぜし儘を。（東都豐山莊にて）

○凡年代順によつて記す。

初世芳澤あやめの教訓

初世あやめは元祿の頃、若女形三ケ津惣藝頭と呼ばれし程の名人にて、俳名を春水と號す、彼れが後輩の役者の爲めに殘せしあやめ草の如き、實に藝道にたづさはる人の金言とも申す可し。

彼れ又舞を好くし、大阪にて海士の玉取の舞をなせる時、あやめ扇を持手格別なりと評よかりし中に、某氏彼に難じてあの場は海原を見やる體なり、海上ゐこそ心を移すべきに扇をふりあげ見るは惡しからんと申しければ彼れ答へて申しけるに、凡舞の一手と申習ひは其舞臺の飾にかまはず、四季の花、雪月山も共に扇子を的に見る事なり、たとゐば此松はと唄へば、扇子を上て松にたとゐ、月は隅なく照り渡りとあれば、扇子へのみ心をば用ゆる事を舞の傳授と致事なり、それを扇に心用ゐず、月といへば空へ目を用ゐ山といゐばあおぎ見る、是れ等は皆拙き素人藝なり、舞の扇は無にして有虛にして實陰にして陽なり、陽中の陰又陰中の陽とて開くを陽の手、疊むを陰の手、取落したる扇を虛の扇、取り上ぐ拾ふ扇は實の手、雪月花になぞらへ見る扇の手は有の扇、にはに持直す扇を無の扇と云ふなりと細々語りしとぞ、聞く人その才秀でたるに驚き、又是れを聞く人々皆感ぜぬ者はなかりしとぞ。

山下京右衛門の金言

京右衛門は同じ頃の名人たり、彼れ坂

田藤十郎をほめて曰く、天性の名人、三ケ津心ある役者の許せし名人なりと語れり。

彼續言してなれども藤十郎は師匠となり、後輩を敎ゆる人にはあらず、則ち天性の名人なるが故なり、そのいわれは木作りの名人が、たとゑば松にてもあれ、さまざまに拵へ枝をねじはめし上出來ありし松と、又天性枝ふりよく生きたる松のごとし、我れの上手は下手よりうまくこしらゑ上げし上手なり、されば今日の上手は下手をねじはめ、能き藝にする事の覺へあり、されば弟子を敎へ、又師匠ともたのまれるなり、又天性の名人は生れながらの名人たれば、我れ枝をねじはめ、作られし事なければ、我又人をこしらへ作るを知らず、去る程に師匠にはたのまれがたしと語りし由、名人の言その當を得しには感ず可し。

初世片岡仁左衞門俳諧を進言

古歌舞伎作者は勿論、役者の學問は俳諧を皆よくなしたり、古作者櫻山庄右衞門はセリフ付に便なりとて、古歌三千餘首を暗記せしとぞ、俳名を鶯山と號し句を又よくせり。

初代片岡仁左衞門は常に傍輩の役者に俳諧を進めたり、その譯は神祇釋敎戀無常、何にしても役に隨ゐ心詞文旨ならず、藝のたよりになる學問なり、依つて役者を俳優とて古く唱へ來りしなんと云へり日常寸暇を得ば筆を取り、思ゐ留る然らば是れを句によみ、常に研究に怠らず、現今の俳優にして甚だしきは俳句、川柳の見さかゑ付ぬ者等あり、古名優の日常のたしなみと並び見るに、その相違大なるを知るべし。

名人のたしなみ

芳澤あやめ坂田藤十郎を評して、藤十郎と狂言する時は大船に乘りし心地にてゆつたりと狂言をするを得と語りしとぞ名人の名人を評せし言に見ても藤十郎の藝の凡ならざるはなし。

三都に於て坂田藤十郎、江戸にての元祖團十郎を知らぬ者、芝居を知らぬ者にして是れ僞らざる言なりと、古書にある如く其の名聲實に高かりき、江戸にて名人と知られし初世團十郎、一度藤十郎に對面なしたき心願なりしも其好期を得ざりし所、たまたま坂地に興行の折を幸ひ歸路彼れを尋ねんと思ひ、使を以て面會を申込めり、然るに折惡く藤十郎病中にて、その意に從はざる由を申せど達ての言葉に日を約して使を歸したり、團十郎心に日頃の願望叶へるを喜び、約束の場所たる東山邊の某酒亭に來りたり、待つ事久し、團十郎少しくその不作法を心に

難じ居りし折節、侍女來りて病中面會を得ず、殊に見にくき姿にて返つて作法をかくの恐れあり云々、いよいよ團十郎立腹なし、はるばる來りし者、是非にと面會を求め又待つ事久しかりき、團十郎心に餘りにも作法知らぬ者なりと、はや立歸らんとする折柄、正面の襖が引きあけられたり、團十郎ふと見るに、是れぞ坂田藤十郎にて、病中の人とは思へず、伸びたるヒゲ一本なく、常人に變る事なし、是れ彼れがはる〳〵遠地より來りし人に、見苦しき病中の姿を見せぬ作法をよく心得、又やつ師の本分を忘れず對面せしなり、團十郎彼の心を知り大いに感じ江戸へ歸りしが、其の後人に語りて曰く、藤十郎在生中は京地に江戸役者登るべからず、所詮彼れに及ぶべきもあらずと申しける、藤十郎は持藝の心を失はず天晴れの者とぞ人々皆口にせる由なり。

因に藤十郎の逸話、金言等餘りにも多く又世人皆知の事ゆゑ多言を略す。

名人加賀掾の名言

淨瑠璃太夫加賀掾は當時名人の聞へ高く、世人彼れを譽めざるはなかりき、その加賀掾の弟子共打集ひし席上、師匠の淨瑠璃は、ふし所になれば見物よく譽める。我々いかほど節を語つても譽める事なく、尤も我々の付けたる節にはあらず、師匠の節付をよく習ひ覺へ語りおるに、更々ほめる事なきは如何と、師に問ひたるに、加賀掾手を打つて笑ひ、我れは何となく淨瑠璃を素直に語り、又節どころにては節を語る。然るに我れ達の語り口は、初めより譽められんと思ひ、終りまで面白く語るが故に、節の所になりても早や面白く語る節なきゆゑに、聞く人の譽める所なし、第一に淨瑠璃を語るに、譽められんと思ひ乍ら語るは、惡しき事なりと申せしとぞ、名人の言かくこそあるべし。

太郎次女に間違らる

小助太郎次といへる花車形、三十ばかりの女房の姿にて、ひらり帽子著けて、付舞臺より向棧敷の下に立づみ居たりしを、同座中の役者の一人、同じく向ふ棧敷に廻り居りしが、ふと太郎次の女姿に見とれ、見物の者と思ひ込みて、太郎次の尻をつねりし所、痛さに思はずふり返りしに、その者始めて太郎次と知り、大いにあやまりしとぞ、いかに正眞の女に見へし事なるか、古き話にはかゝる話たま〳〵ありしとぞ。

使者の失策

中川金之丞といへる立役の役者、おかしき事實に天性の上手なりしが、ある狂言にて使者奏者對談の所へ、金之丞茶の給仕役にて出でしが、茶わん差出し引き下りて控へ居る内に、ふと過つて茶臺を左の手にさしこみ、やゝあつて使者用事

を言ひ付ける折、金之亟かの茶臺手に押し込めしゆゑ急にぬけず、痛み難儀なるをかくしたる思入、一段とをかしく、見物喜び滿場をうならせたり、その評判かへつて好く、毎日その場にてかく致せし所、興行も思ひの外の大入を取りたり。

名作者の言

花車形役者彌五左衞門は狂言作者としても又名人なりき、此の人については富永平兵衞にて、狂言の作者と書初めしは彼れからにて、延寶八年の暮の顔見世の折なりしが、いかなる事にや諸人にくみて見物せず、それよりして平兵衞打ちつゞき傑作出でず、某今一としほ工夫なし能狂言を致されよと申せしに、平兵衞笑つて曰く、悪き狂言を出すはよき心持にてはあらねど、座方衆は仕合せの事なるべし、なぜなれば替る度毎に能き狂言を出して、萬一そのよき狂言に見物見あきなば、やがては道頓堀に草はゆべしといへり、いへば言はるゝ物と笑ふ人もあらんも、彼れの言又當を得しとも思はるゝ。

若衆形のたしなみ

澤村小傳次と云ふ若衆形役者、藤田孫十郎芝居にすみ、わが身は都万太夫へ住みたる年、同座にて若衆形の鈴木平七と鑓の仕合の所にて、女形浪江小助わけ入つてなだめる事あり、其所へ敵役笠屋五郎四郎來り留めるセリフの中に、すでつちめらがと云ふがあり、小傳次聞いて大いにいかり、明日より出勤せじと斷り云ふて出まじきと、その儘孫十郎座へ走りたり。彼の曰く、いかに狂言なればとてすでつちと云ふは餘りにもひどき事にて色の障りになるといへり。

……著星寒本堂……

〝南　座〟

特賣　二圓五十錢

編輯部宛に御申込みください

編輯後記

爽涼の秋！關西劇壇は中座東西合同大歌舞伎の二部制を始め浪花座は松竹家庭劇歸演に文樂座がまた〳〵新作を携へて中堅陣を布く

十月歌舞伎座の竣工を間近に關西劇壇の秋はやうやく多事ならんとして居る。

×

殊に、中座の歌舞伎は、福助、魁車のコンビに、東京より壽美藏、松蔦、龜藏、訥子といふ花形連の來演で、潑剌たる新陣容に、晝夜新作揃ひに、歌舞伎の新境地は、充分に拓かれてゐる。

×

問題の「重井筒」に、高安博士、倉田啓明兩氏の研究、福助魁車のコンビに對して、西尾、大澤兩氏の讃美言は、近松の「重井筒」を中心に興味深く讀まれる。研究、考證、評論である。

×

劇文壇の御所岡本綺堂先生から「浪花春雨」についての御惠稿があった。

この劇がその初演に當り「心中」の文字がその筋より禁止となつた話は心中ばやりの當節なんとなく讀者の氣持を惹くものがありはしないでせうか……

×

心中と云へば「重井筒」もまた心中流行期の作だといふことです。

×

（住田生）

昭和七年九月一日發行
雜誌『道頓堀』第七年第七十二輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和七年八月卅一日 印刷
昭和七年九月一日 發行
大阪市南區久左衛門町八番地
編輯兼發行者 鳥江鎮也
大阪市東成區鉢植南之町一丁目
印刷者 北島竹次郎
大阪市東成區鉢植南之町一丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹興行株式會社大阪支店
道頓堀編輯部
電話南（一二四〇番）（六六八五番）

便所の防臭に困りの方は今直ぐ

藥學士　林彪太郎氏創製

(定價一瓶小金五拾錢 大金壹圓)

家庭必備品

アポロ

脫臭劑

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがいりません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の藥（カンプラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが殘らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

△使用法　一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

到る處の藥店
各百貨店に販賣す

發賣元

大阪市東區伏見町三丁目　光榮商會　電話本局三三一五番　振替大阪三三一一七番

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和七年八月廿一日印刷（毎月一日）
昭和七年九月一日發行（一回發行）

「蓮堀」第七十二輯　第七年九月號

一部　金參拾錢

督監・色脚・作原　稔　塚犬

ーキートルーオ

紙草ぎなふゆ　怪談

子梅林大・子飯塚敏子・柳さくこ

演出援護・瀧口新太郎・尾上榮五郎

松竹キネマ株式會社

切封回近